論文編

写280　細田邸と庭門

細田邸庭園

西　桂

所在地　竹野町轟
管理者　細田昌氏
作庭時代　江戸時代中期
庭園様式　池泉観賞式庭園

一、細田家の歴史と概観

江戸時代の但馬は、社会の安定と共に、村岡・出石・豊岡の町々を中心に城下町として発展し、その地域の政治・経済・文化の中核となってきた。日本海に面する竹野は、ややこれらの中心地から離れてはいたが、北海道や九州へ向かう千石船が幾艘となく出入りする但馬一の商港としてにぎわった。

竹野港より少し南へ入った所に轟があり、そこに細田家がある。当家は、竹野町一帯と香住町の下岡あたりまでの大庄家であった。

細田家は、もと摂州住吉の宮侍で、姓を永田と称していた。豊臣家に仕えていたが、大坂の陣（一六一四～一六一五）で、大坂城落城と共に出石に逃れて三年後、「轟城麓字提カ鼻」に移住してきたのが但馬における細田家の元祖である。

それより一代を経て、次左衛門の代に、現在地の「轟」に住居を定めた。この次左衛門の妻が、同じ轟の細田市郎右衛門の子女であった。ところが、細田家が廃絶したために、舅家の根絶を嘆き、永田・細田両家の双行を期して、永田姓を「細田」に改姓したという。

屋号を「住吉屋」と称し、酒造業を創始し家運はおおいに振ったといわれ、次左衛門の嗣子は敬之（平四郎）といい、家運興隆、且つ上下の信望が厚く大庄屋を拝命するに至る。庄屋への任命は、一般には伝統的に農民の中心となっていた家柄、あるいは名主・土豪的農家とか、指導者であった草分けの百姓とか、村内で大きい石高（土地）をもつ家が任命された。そうした点から考えて、新しく当地に入り間もない細田氏が任命されたのは異例のことと考えられ、それだけにいかに人望が厚く手腕があったかが想像される（宝暦六年十一月四日歿）。

敬之の嗣子・敬豊（清助・平四郎）は、号・大年、画名・周英と称し多才であった。彼は世に聞こえる侠気に富める人柄で、父にもまして人々に慕われ人望が厚かった。針術も学び、大庄家の身をもって施療もした。敬神崇仏の念も厚く、神社仏閣の振興にも一段と努力したという。

画を学び、文学にも志した関係で、趙陶斎（一七一一～一七八六）や、吉村周山（?～一七七六）とも交情する文化人でもあった。しかし、晩年になり大庄屋を辞退する。その理由は不明であるが、嗣子・敬篤が早世

したことや、晩年は家運が振わなかったことと無関係ではあるまい（寛政八年八月二日歿）。

大年の死後は、孫の代に至りても男子がなく、今津の細田宗兵衛憲時の長男を迎え、豊昌（清次郎・平四郎）を襲名する。彼は家運不振の後を承け、おおいに家政を振興して、一家の危難を回し寿福を全うしたという。資質豪侠、仁慈に富み、出石領下第一の人傑と称され、再び大庄屋を拝命する。文学の志も厚く、画も好み（画名・周岳）、晩年、方斎と号した（嘉永五年二月十三日歿）。

豊昌には四男一女あり、三男圭（安造・平四郎）は学を好み、佐藤一斎翁に三カ年間徒学する。長兄が歿した後の細田家を嗣ぐ。圭について桜井勉は、「謙にして屈ならず、威ありて猛ならず、温々で恭人也」と評している。しかし、明治維新の革命に際し、財政上の打撃を受け家産は傾いた（明治二十一年九月八日歿）。

圭の嗣子は、長男璣（ちかし）（平四郎）で明治元年生まれ、いったん中絶した酒造業を再興し、衰微していた家政を興起させ、よく細田家の体面を維持して、村会議員、村長の職に任じて名声を博した。

現当主・昌氏は、但馬における細田家の祖先から数えて十一代目に当る。

二、作庭時代と作者について

本庭の作庭時代を考察する上において、重要な手がかりとなるのが当家に残る「家図」（七九㎝×七九㎝）である。屋敷全体と建物が詳細に画かれており、その中に何といっても注目されるのが、「起し絵図」ともいうべき描法で、庭園図が見事に描かれていることである。現況と若干異なる部分があるものの、本庭であることは間違いなく、作庭後に描かれたものであることも大体にわかる。

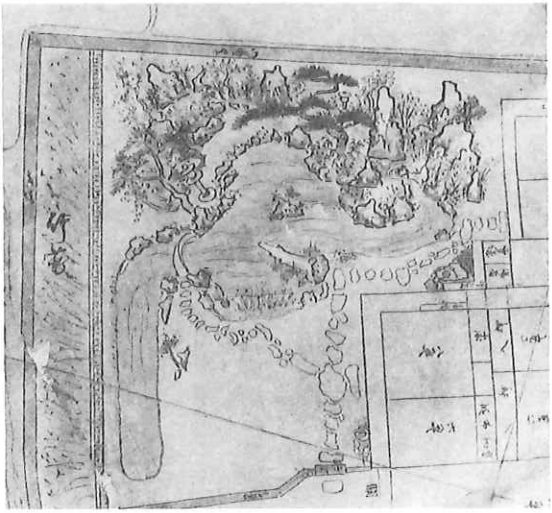


図55　庭園図（近江八景をテーマ）の描かれた家図

この家図が、いつの作成であるかが大きな決め手となるが、残念ながら年代は記されていない。ところが、時代を推定する証拠が存在する。それは、現存する庭門を入った所にある「鍵型中門」が、図上では見られないことである。さらに中塀を挟んで「湯殿」が作られていたのであるが、これも図上に描かれていない。詳細に描かれているこの家図に、当時これらが存在しておれば描かれないはずはない。

実は、この湯殿は「殿様湯」とも呼ばれていたものであるが、昭和に入り取り壊してしまった。この時、安政三年（一八五六）の棟札が上っていたのである。それ故、この湯殿の画かれていない家図は、安政三年以前の作成ということになる。

さて、大庄屋で多才・多芸であった大年には、親交の深かった文人に趙陶斎がいる。

当家に残る陶斎の階書『蘭亭記』の、法帖の原本である額面および巻軸に、「己卯七月（宝暦九年）、書して周英（大年）に与ふ」、「己卯七月十九日、陶斎趙養、軍邑に書す」などの落款がある。また、陶斎が六十九歳（天明二年）の時、大年に与えた手紙に、「人一代の内、二十年三十年の交りは、父子兄弟と申すも、得がた

き事に昔より申あらはしたる事に」などの言葉もある。天明二年（一七八二）より遡りて宝暦九年（一七五九）は、二十四年前に当るので、大年と陶斎との交際は大体に宝暦九年以後と考えられる。

また、陶斎の法帖のうち、『蘭亭帖』の奥書に、「今歳己卯山陰に遊び、美含縣（現・城崎郡）轟村の周英の家を主とす。七月十九日より閏七月将盡に至るまで留まれり、周英の居は、四山軒をめぐりて屏の如く、渓流庭に入りて池を作す」とある。ここに記された如く、竹野川に平行して塀の外を小川が流れ、一部を庭内に引いており、文中にいう、「渓流庭に入りて池を作す」そのものの手法が見られる。これからしても、宝暦九年にはすでに庭園は作られていたことが判明する。

趙陶斎は、もと清人趙氏で、疾(や)む父母を喪(うしな)い長崎に来て、笠禅禅師に釈服すること二十年、旅ぐせがあり、その足跡は全国におよんだという。

この清人陶斎を迎えるに当って、庭門を中国風の「鍵型中門」に作りかえたか、あるいは陶斎の指導で新設したかは定かでないが、この中国風の中門は、陶斎と関係があるように思える。

ところで、大年は画もよくし、画名・周英を名乗る程の腕前であった。この家図に描かれている庭園図は、水墨画的な起こし絵図である。なかなかのできばえからして、大年自身が自ら描いたものではないかと思う。

大年時代は、大庄屋としての華々しい時代であり、藩主や文人を迎え

写281　庭門と鍵型の中門

ることもしばしばであっただろう。そうした点からも、彼の時代に作庭した可能性は最も高いと考えられ、本庭は一応、宝暦年間（一七五一～一七六四）の初め頃には作庭されたと考えのるが妥当と思う。

三、庭園構成と様式手法について

庭門である鍵型中門を入ると開けるのが本庭で、面積約四三二㎡（一三二坪）の池泉観賞式庭園で、「近江八景」を象（かたど）った庭園構成と伝承されている。

現在中島になっている部分は、家図によれば中島でなく出島になっている。そして現在は、切石橋と自然石の石橋が架かっているが、当初は切石橋だけであったことがわかる。

庭の中心は、北東部に組まれた枯滝石組である。これを構成している数石は、庭園全体の中でも巨石を使い、本庭の最も重点的な石組である。手法的にも美学的にもなかなかの技術と見所を持っている。つまり、滝石組を正面から見れば、水落石（八三㎝）を中心に、滝添石（右一八七㎝、左一三〇㎝）を組んだ一般にみられる枯滝で自然風な表現である。ところが池畔に沿って右方へと移動し、滝後方部のもとあった奥座敷へと向かって行くと、先に見た自然風な滝表現は、三尊石組式による抽象的な枯滝に変化することに気づく。つまり、縁先手水鉢付近より見ると、もとの水落石は、右滝添石に隠れて見えなくなり、代わって左滝添石が水落石となり、それまで左滝添石の左に控えていた斜石（一六七㎝高）が、新しく滝添石へと変化して、以前には見られなかった抽象的な三尊石による力強い枯滝が出現するのである。

これは、石組の平面構成からみて、作者の意図した創作造形であるように思われる。また先の斜石は、正面

からみれば、滝石組の控え石で斜石である点などからみて、大亀が蓬莱山を背負った亀の亀頭石を表現しているようにも見える。

枯滝の後に存在する遠山石と思われる一石（一四五㎝高）は、本庭の中心石（守護石）でもあり、堂々として安定感がある。

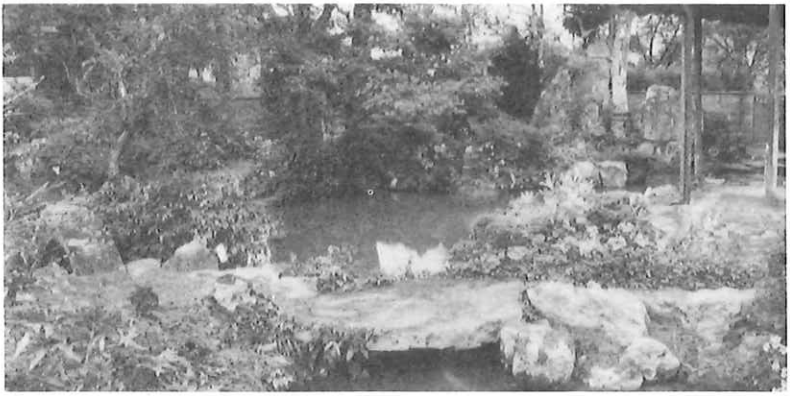
園池は、滝壺を隠すように曲がって広がっていくが、その形からして、伝承にあるように近江八景をテーマにしたものと考えていいだろう。家図には竹生島（現在は崩れて存在しないが島跡が確認できる）があり、瀬田の唐橋、石山の景観といったものも認められる。書院（青龍館）の室内に掲げられた額は、加藤文麓（一七〇六～一七八二）の画に陶斎の題辞のあるもので、これは近江八景を描いた画のようである。

竹生島に当る岩島に代わって、新しく中島が作られた。実測図と家図とを比較してみるとよくわかるように、切石橋はそのままにし、中島を設けて、その対岸に新しく石橋（自然石）を架けている。

写282　枯滝石組

切石橋は、長さが二二〇㎝、幅四四㎝、厚さ一七・五㎝であるが、反りが五五㎝もあり、長さに比較して反りが大きく、実用性よりも観賞に重きをおいている。

新しく架けられた自然石の石橋は、長さ二〇三㎝、幅一四五㎝で、水面より三八㎝の高さに架ける。



写283　細田邸庭園

土蔵も、家図にはないもので、もとは竹藪であったことがわかる。園池の水は、この竹藪の下を通って引いており、排水は、築山の中央より外へと流れる排水路を設けている。

園池の汀に沿って打った飛石や、一部に敷いた「あられこぼし」の、のべ段が格調高く、ひときわ目立って美しい。その他、鉢前手水鉢は二基あり、燈籠は、春日形、三州形の他に山燈籠が一基ある。

護岸石組に倒れたり崩れた部分が一部あるが、大体に当時の姿が保存されているのはありがたい。

四、観　賞

竹野町には、本庭以外に、隣りの集落・林に存在する飛蛟泉（旧大部邸）庭園があり、共に民家の庭として、それぞれ特徴を持っており、比較研究する上でも好資料である。

昭和五十八年の春、この旧大部邸庭園を調査の折、菩提寺である蓮華寺（竹野町轟）を訪ね、住職平田俊昇師に案内されたのが、大部家と親族関係にある細田家で、本庭を見た最初であった。

長屋、母屋、鍵型中門など、大庄屋の雰囲気を偲ばせる家の構え

で、それに負けない枯滝石組の豪華さが目を引いた。

民家に存在する庭として貴重なだけでなく、本庭は、起こし絵図的に庭園図が描かれた家図、趙陶斎の詩をはじめとする多くの資料など誠に得難いものであり、近江八景をテーマとする庭園構成と共に、庭園史上、貴重な一庭といえるだろう。

(注)　「兵庫の庭園」　西桂著　昭和六十二年同朋舎出版から転載〔写真・図は一部略〕

飛蛟泉庭園

西　桂

所在地　兵庫県城崎郡竹野町林
管理者　長沢春海氏
作庭時代および庭園様式　書院庭園（東庭）江戸時代中期、池泉観賞式庭園
裏庭（北庭）昭和時代、準平庭式枯山水庭園

一、大部家の系譜と概観

桜井良翰が著した『但馬考』（一七五一）、その子孫である桜井勉が大正十一年に校訂した『校補但馬考』は、但馬史研究における最大の基本図書である。この中に、「飛蛟泉」と題する大部邸庭園についての記事があり注目していた。

ようやく当家を探し当て訪ねた。しかし現在無住状態で、住居の構え、建築などには旧家の風格を感じるものの、庭は樹木類が生い茂り、滝があり落水しているようであるが、滝の様相は全くわからない程の状態であ

った。

大部家は、もと林氏と称したが、天祐道珠居士（？～一六一八）の時代に、大部氏と改め、大部孫大夫と称し、以後代々孫大夫を襲名している。

二代目孫大夫（？～一六五四）が没した後、三代目孫大夫義孝は、明暦元年（一六五五）初頭より家を継ぎ、宝永六年（一七〇九）に没するまでの五五年間は、家門の繁栄に努めて、その功績は大きく大部家の中興と称されている。

また、天明元年（一七八一）に没した七代目孫大夫勝苗は、特に理財に長じて、大部家はかつてない繁栄をみたといわれ、「但馬富豪の巨擘」と称されるに至った。この勝苗時代は、氏を復して林と称したが、次代には再び大部氏を名乗る。

写284　飛蛟泉庭園

八代目孫大夫鷹勝は、多才・多能であったという。書に優れて、趙陶斎（一七一一～一七八六）に学び、弓術も巧みで、山腹に弓場を設置する程であったらしい。その他、生花に妙じ、琴・三絃にも長じたという。この遊芸三昧によって、家道は衰えの気ざしをみせはじめたという。

九代目孫大夫義知に及んで、前代以来の家政の乱れはますます甚だしくなっていった。義知には子供がなく、養子に久平（滝本家）を迎えたが、婚せずして没する。

ここで、親族の細田家（轟）より養子を迎えて、十一代目孫大夫昌篤が跡目となり、同じく親族の長岡家（日高町）より嫁を迎えて婚す。

十二代目孫大夫昌康は、林村の村長として君臨し、同和対策事業では、先駆的な事業を行なった名村長であった。

十三代目孫大夫の代に、大部家は、姉の嫁ぎ先である長沢家に渡り、長沢薫（昭和三十六年寂）が跡を継ぎ、現在は、その長子である長沢春海氏（宝塚市在住）が管理し現在に至っている。

二、作庭時代と作者について

桜井勉『但北紀行』は、文字通り但馬北部の紀行文であるが、その中に、大部孫大夫を明治二十五年十一月に訪ねた興味深い記事がある。三日間大部家に滞在し近辺を見てまわっているが、これは、『校補但馬考』執筆のための資料集めといっていいだろう。当時は、十一代目孫大夫である。庭園内を散策しての感想や、作庭について主人に尋ねている記事などもあり興味深い。この中で作庭に関する部分を紹介すると、

「主人曰ク伝ヘ云フ七八代前京師禁裏ノ園丁城崎ニ来浴スルヲ聞キ聘致シテ之ヲ創ム其後造園師花木ナルモノヲシテ之ヲ修セシメ又鉄仙ナルモノヲシテ之ヲ修セシメント」

とある。また、同『校補但馬考』には、

「飛蛟泉、林村大部氏の園中にあり、先世の時禁苑の園丁あり、城崎温泉に浴す。請て林泉を経始し、其後造園師花木及鉄仙をして之を修せしめしと云ふ、樹木幽雅、泉其間に瀉下す、壮快比なし、文久の頃、赤穂藩士河原駱之助来りて之を奇とし、為めに名を其師土井聱牙先生に乞ふ、先生名けて飛蛟泉と云ふ、

蓋陸放翁蒼崖濺落素蛟飛の句に基くなり、寄題の詩歌、極めて多し」

と作庭についての記事や、「飛蛟泉」の由来について書かれている。今のところ、「花木」および「鉄仙」という庭師についての資料が他に見当らず、これ以上追求することはできないが、御所に出入りの某庭師の弟子か、それに近い関係の者であることが大体に想像される。

作庭時代については、「七・八代前」という言い方をしている。この記事をそのまま当てはめると、「四・五代目孫大夫」時代ということになる。この時代も当家の隆盛期と一応考えられ、五代目孫大夫は、大体に宝暦末年（～一七六四）頃まで活躍したと推定される。

庭園様式は裏山の斜面を利用した池泉観賞式庭園で、石組は全体的に伏石、横石を中心としたもので、江戸時代も後半の特徴を有している。

一般に民家での作庭が始まってくるのは、例外はあるが江戸時代中期頃である。『但北紀行』などで記されている事実は、信憑性は高いが、言い伝えは、伝承されていく中で、代を追うに従いより古く伝えられていく場合が多い。

本庭の、言い伝えや庭園様式をみた場合に、江戸時代中期以後の可能性が高く、もう少し絞って考えるなら、大部家の歴史の中でも盛時といわれ、「但馬富豪の巨擘」と称された七代孫大夫時代、つまり安永年間（一七

七二～一七八一）頃である江戸時代中期の終わり頃とみるのが妥当なところではないかと考える。

一方、裏庭に存在する枯山水庭園は、準平庭式の石庭で、様式は古風のものであるが、古老に聞くとそう古いものでないと言われ、昭和のはじめ頃の作庭らしい。

三、庭園構成と様式手法

本庭は、池泉観賞式庭園（東庭）と準平庭式枯山水庭園（北庭）の二庭から成る。池庭は面積約七二〇㎡（二一八坪）、枯山水約一七二㎡（約五二坪）の広さを持つ。民家の古庭園の規模としては大きい部類に入ろう。

池庭は、裏山を利用した作庭で、傾斜部に滝を組み、下部は園池で池中に舟石を組む。橋は、池のくびれに自然石の石橋と滝一段目に切石橋が、また園路に木橋がそれぞれ一橋ずつ架かる。

中島の代りに東南から突き出た出島があり、園池に変化と奥行をみせる。

庭園構成の中心は滝石組で、ある部分は数段に小さく落ち、ある部分は流れ形式となっているが、全体的には三段落である。滝の総高は約六・二mあり、これは全国的にも最大級のものである。滝の高さが滝石組の優

写285　出島付近と舟石

劣を決定するものではないが、庭の構成としての一条件であり、高く組むということは、それ相応の技術と立地条件が必要条件になる点からも、当然そこに生じる特色を持っていると評価してよい。

さらに、裏山から流れ出る水が豊富で、それをいったん水槽に溜めて滝へと引いている。季節により差はあっても常時流れ落ち、四季を通じて涸れることがない。

滝の最上段に、九二㎝高の守護石を兼ねた遠山石があり、滝の立面的構成からも、庭全体の構成からも中心にあり、その効果は大きい。

写286　枯山水庭園

守護石に対峙して左に山頂石と称すべき立石（八五㎝）があり、バランスよく調和させている。

出島に蓬萊石（九〇㎝高）と考えられる横石を中心にして一連の石組があり、庭の景観としての一つのポイントを構成する。

園池に架かる石橋は、長さ一六七㎝の自然石で、幅は最長一〇五㎝、厚さ二〇㎝のものである。滝に架かる切石橋は、長さ九六㎝の観賞が主体のもので、他に山腹への園路に長さ一七〇㎝の木橋を架けている。

滝上部の平坦部には、もと四阿（あずまや）があったといわれ、その基礎跡を確認することができた。

護岸石組にはこれといった特徴はないが、舟着石付近の石組は

写287　築山上部より俯瞰

派手さはないが、巧妙な技術を駆使した優れた石組がみられる。

一方の枯山水庭園は、比較的新しい作庭とはいえ、龍安寺風の石庭で、例の少ない様式であり、その希少性と共にここにも非凡な石組技法の配石を見せている。

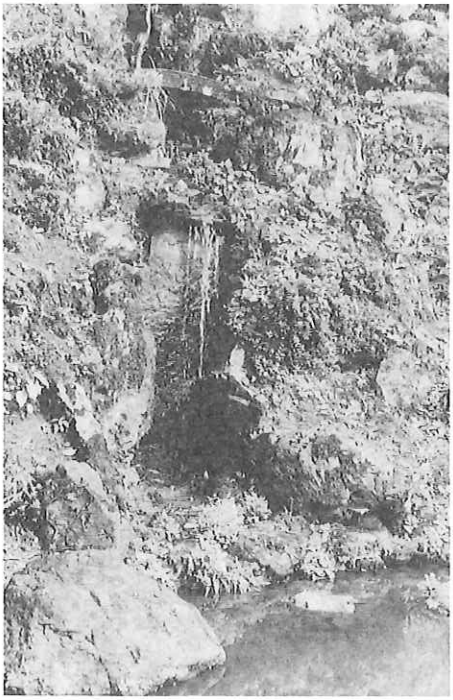
四、観　賞

但馬の春の訪れは遅く、本庭を初見したのは、三月も終りだというのに、未だ山々には雪が積もっていた。その雪解けの水を受けて、かなり高い所から園池に水が注がれていたものの、滝の様相は全くわからないほど樹木が生い茂っていた。この下にどんな庭が眠っているのか期待と不安感を抱きながら、何とかこの庭を整備してみたいと、宝塚市在住の長沢氏を尋ね、また、「播州緑と庭の会」という若い造園家の集りである勉強会に話したところ、「会のボランティア活動の一端として取り組みたい」という協力を得て、昭和五十七年七月二十五・二十六日の二日間に渡り、

会員十名の他、近在住民の奉仕活動も得て作業を進めた。

庭園整備が進行する中で、最大級の高さを持つ滝の出現や、美しい地割を持つ園池などが現われ、内心ほっとしながら往時の景観を蘇らせることができた。このようにして、雑木・雑草などを整備し、明らかに崩れている一部の石組を補修したのにとどまり、石組や地割の変動はいっさいないことを明記しておく。

『校補但馬考』などに、作庭者などと共に名園として掲載されている本庭は、日本庭園の中でも最大級の高さを有する滝石組や、石庭などとも合わせて、誠に貴重な一庭と思われる。この整備を機会に、この庭園景観を何とか観賞できる状態で維持したいものであるが、日頃は無住状態であるためになかなか難しい点が多い。できれば文化財に指定し、維持管理が行き届くような対策を検討してもらいたいと思う。本庭はまたそれだけの価値ある一庭と考える。



写288　高さを誇る滝石組

(注)「兵庫の庭園」　西　桂　昭和六十二年同朋舎出版から転載〔写真・図は一部略〕

北前船海難の一研究
―但馬国竹野浜を中心として―

一、序

江戸時代の中期以降より次第に経済が発展し、商品流通量が増大していくなかで、日本の沿岸を航行する廻船も多くなってきた。しかし、これと正比例して難船・破船という海難も増えることになる。

日本の廻船は、その構造上いったん海が荒れると、沈没の危険性が高かった。また、西廻りの北前船は、東廻りより一・五倍の長い航路であり、気候の不安定な日本海でもあった。こうした廻船は、一度に多量の荷物が運べ、その利益も大きかった。それゆえ、利潤を多く上げようとして、どうしても荷物の積み過ぎが起こり、海難の一つの大きな原因ともなった。結局、一度に大きな利益も得られるが、しかし、いったん海難に遭うと当然その損失も大きなものとなり、小規模な船主などは再び立ち直ることが不可能となった。

ここでは江戸時代の竹野浜（現・兵庫県城崎郡竹野町）の北前船の海難の事例と実態を、限られた史料からではあるが紹介してみよう。そして、危険と絶えず隣合わせの荒海に命をかけて向かっていった、海の男の意気込みと信仰心を、すこしでもうかがい知ることができればと思う。

二、竹野浜の海難事例

そこで、竹野浜の海難の事例を、(A)「村内廻船」と、(B)「他国廻船」の場合に分けて、発生年代順に表にしてみた（表158 159）。

表158 (A)村内廻船海難事例

年月日	海難関係者・廻船	海難場所	海難状況・その他	出典
寛延二年六月二十六日（一七四九）	平七・甚七	加賀浜にて沈没死亡	新潟より船積み	『興長寺過去帳』（竹野・興長寺蔵）
安永二年一月（一七七三）	善五郎	江戸北浦にて死亡		『興長寺過去帳』（竹野・興長寺蔵）
安永九年四月十九日（一七八〇）	竹野浜彦治郎	越後にて死亡		『興長寺過去帳』（竹野・興長寺蔵）
寛政九年五月二十五日（一七九七）	藤右衛門船、三人乗、自分荷物積み	加賀安宅町浦へ乗り上げる	乗組員全員無事、積み荷も取り上げ無事で、六月二十四日帰村	『興長寺文書』（寛政九年七月、竹野・興長寺蔵）
文化十一年七月二十九日（一八一四）	竹野村弥七衛門船、沖船頭第吉右衛門等三人乗	田口五郎左衛門支配、丹後国間人浦	越後国出雲崎より米二八〇俵積み出し、七月高波にて難船、乗組員無事、荷物も程々上げる	「願上書控」（『福田八郎右衛門文書』文化十一年正月吉日、竹野・福田敏雄蔵）
文政二年四月十五日（一八一九）	竹野冨田屋船	竹野浜	橋船で水主二人が元船に向う途中、高波にて破船死亡	『難処之道記』（竹野・鷹野神社蔵）

文政三年十月十二日（一八二〇）	竹野村直船頭与右衛門等三人乗	浜詰村湊	若州小浜より出帆、浜詰湊で大風高波となり、村中の加勢があったが破船	『福田八郎右衛門文書』（文政二～六年、竹野・福田敏雄蔵）
天保五年九月（一八三四）	竹野村八郎右衛門船	加賀にて難船		『御公用日記』（天保五年正月、轟・細田昌蔵）
天保五年春（一八三四）	孫三郎船		難船	『御公用日記』（天保五年正月、轟・細田昌蔵）
天保五年九月（一八三四）	竹野村与治右衛門船、清左衛門船		難船	『御公用日記』（天保五年正月、轟・細田昌蔵）
天保五年秋（一八三四）	善右衛門船	丹後	難船	『御公用日記』（天保五年正月、轟・細田昌蔵）
天保十一年（一八四〇）	竹野村久四郎船	諸寄村	難船	「旧西浜村役場文書」（『諸寄港関係分・『浜坂町史』）
弘化二年四月二十一日（一八四五）	向浜太四郎船乗組員四人	竹野浜	竹野浜を出帆して流失、船員は打ち寄ったが、船は行方不明	『難処之道記』（竹野・鷹野神社蔵）
慶応二年四月十日（一八六六）	竹野浜村多三郎船五〇石積、直乗船頭多三郎等三人乗	因州岩井郡網代浦	網代湊に風待ち中、風が強くなり、元船は磯辺に打ち寄せ破船、乗組員は他船に救助され、荷物も可能な限り引き上げられた	『船頭水主口上之覚』（竹野・住吉純一蔵）

表159 (B)他国廻船海難事例

年月日	海難関係者・廻船	海難場所	海難状況・その他	出典
寛政七年八月（一七九五）	但馬国浜坂村船二人乗	竹野沖		『浜坂町史』
文政二年四月十五日（一八一九）	越後国荒河船	竹野浜海岸	沖の小嶋に衝突、四人の内二人が助かり、二人不明、竹野浜の一人が助船に出て溺死する	『難処之道記』（竹野・鷹野神社蔵）『口佐津村誌』（第一二部・藤本和造著・香住町無南垣・藤本康成蔵）
文政四年九月十七日（一八二一）	加賀国石川郡粟崎木屋藤右衛門船、沖船頭与兵衛	隠岐国沖合	八月十五日隠岐にて破船、九月十七日大金の入った懸硯が竹野浜に流れ着いた	『福田八郎右衛門文書』（文政二～六年、竹野・福田敏雄蔵）
文政九年十月五日（一八二六）	越前国安嶋浦吉右衛門船、沖船頭長右衛門等八人便船人二人	竹野浜賀嶋山沖	高波により磯の岩瀬に衝突し破船、乗組員は弁天山に泳ぎつき、全員救助されたが、積み荷の塩は沈んでしまった	『福田八郎右衛門文書』（文政六～十二年、竹野・福田敏雄蔵）
嘉永三年五月十三日（一八五〇）	大坂柳屋利三郎船、沖船頭栄蔵等一六人、帆二七反（一五〇～一八〇〇石船）	田久日村三・四〇里沖	酒田湊から米一一八〇石余を積み、十二日能登猿山沖で風が強くなり、十三日田久日村沖で放船字荒磯に伝馬船で漂着、三人溺死	『大坂船難船証文事』（嘉永三年五月十八日・田久日区有）

なお、参考までに近港の事例をみると、『港村誌』[1]には、瀬戸村（現・豊岡市）分遭難廻船として、天保七

年（一八三六）から文久元年（一八六一）まで一二件（『瀬戸村文書』）、気比村（現・豊岡市）の他国船分遭難廻船として、寛保元年（一七四一）から安政五年（一八五八）まで八件（『気比村文書』）、そして津居山村（現・豊岡市）破船遭難として、享保十七年（一七三二）から安政六年（一八五九）まで八件（『照満寺過去帳写』）と紹介している。また、『浜坂町史』[2]にも、諸寄村（現・浜坂町）分破船・難船として、天明三年（一七八三）から明治十一年（一八七八）まで二八件（『旧西浜村役場文書』）を挙げ、この他に浜坂港分三四件、三尾（現・浜坂町）分七件、指杭（現・浜坂町）分一六件、芦屋村（現・浜坂町）分八件の記録があるとしている。

三、竹野浜の海難実態例

(A) 村内廻船

前掲の海難事例表にも一件紹介しているが、『細田平四郎忠平録』[3]の天保五年（一八三四）付に、「当春今秋ニ至、竹野村商船処々ニテ難船致候也」と、竹野村の廻船の海難が多かったとしている。また、安政五年（一八五八）二月十日、「難船の濡れ米について公儀へ報告（美含郡宇日村ほか）」[4]という記事もみられる。ここでは、海難事例表の代表的なものをいくつか挙げ、その実態をみてみよう。

(1)寛政九年（一七九七）五月二十五日、竹野浜村の藤右衛門船（三人乗・自分荷物積み）が、加賀国安宅町浦（現・石川県小松市）で難船した。竹野浜村の庄屋永田伊左衛門、組頭宇屋弥右衛門、同住吉屋与次右衛門、長百姓永田治良左衛門が、七月加賀国安宅町役人衆中へ、次のような内容の『礼状』（写289）[5]を出している。

寛政九年五月二十五日、竹野浜村の藤右衛門船が出帆した。昼から西風が強くなり高波も起こり、三国浦（現・

写289　難船救助の礼状（寛政９年７月）
（竹野・興長寺蔵）

福井県坂井郡三国町）へも帆を寄せることができず、沖合いへも乗り出せず、同夜やむなく安宅町浦へ船を乗り上げてしまった。そこで、役人たちが人足を出し救助してくれ、船頭・水主らは無事であった。その上、積み荷なども損失なく取り上げてくれ、かつ定法の「歩一」などまで許して下され有難く思っている。六月二十四日帰郷し、船中の銘々が委細に物語り、家の者はもちろん村中も安心したことである。役人衆には、心配高恩をいただき、入念な印形の浦手形も拝見し、厚くお礼を申し上げるというものである。

この中で、「歩一等迄御用捨被レ下候」とあるのは、江戸時代の廻船法度の中核となった『高札之写』(6)の一カ条に、「船破損之節は、近浦之者、精ニ入荷物舟具等可ニ取揚一之所之者荷物之内、うき荷物ハ二十分一、沈荷物は十分一」とある中の、何分（歩）一に当たるものである。つまり、海難廻船の漂着物拾得の報酬のことで、これを辞退しすべて持ち主に返却するというものである。地元の良心的対応が知れよう。

(2)『御尋ニ付、有体申上候口書之事』(7)によると、文政三年（一八二〇）十月十一日、竹野村の直船頭与右衛門、水主甚五郎、同亀蔵の三人乗廻船が、若州小浜（現・福井県小浜市）より出帆し夕方浜詰湊（現・京都府竹野郡網野町）に入津した。しかし、大風・高波になり、翌十二日やむを得ず村方の役人へ救助を依頼したと

ころ、早速村中が加勢に出て、いろいろ働いてくれたが、叶わず破船してしまった。そしてこの件を、

御役所ェ御注進之趣、村御役人様ゟ被レ仰儀候処、船頭共御願申上候ハ、私義(俗)隣村殊ニ小船ニ御座候得者、御上様ェ御届ケ被レ下候テハ、甚難渋ニおよひ候間、此段御推察被レ下御届ケ不レ被二成下一候様立テ御願申上候処、御勘弁之上、願之通御聞済被レ下忝奉レ存候。

としている。

ここで注目されるのは、一応こうした場合は、後述の五、(B)事後処理でもふれるが、必ず役所へ届け出て見分を受けなければならなかった。しかし本件の場合、小船であるので役人へ届け出ず、見逃してくれるように申し出て許されている。船頭も地元も、いろいろ役所の取り調べや手続きが煩わしかったのか、当時の法の抜け道というか、こうした事例が当然横行していたのであろう。非常に興味ある事柄である。ちなみに、『浜坂町史』[8]は、「因州賀露浦(現・鳥取県鳥取市)竹田屋八十兵衛船難船」・「加州本吉(現・石川県石川郡美川町)松任屋長二郎船難船」・「隠岐国嶋後周吉郡失(マヽ)尾村徳十郎船難船」の各事例で、役所へ届け出ると日数がかかる上、大変苦しい身であるから、内緒にしてくれるよう申し出ている。

いっぽう、「其上以二御憐愍一ヲ、積荷物并ニ船道具等御取集被レ下、荷物・船道具不レ残私勝手ニ取斗可レ致様被二仰付一、千万忝仕合ニ奉レ存候」と、前掲の事例同様、大変親切な気配りをしている。このようにして、三人の乗組員の『口書之事』は、竹野村の庄屋・親分・類家の奥書を記し、浜詰村役人宛に提出された。

(3)慶応二年（一八六六）四月の『船頭水主口上之覚』[9]によると、竹野浜村の多三郎船（五〇石積・直乗船頭多三郎・水主二男市松・倅(セガレ)豊蔵）が、松板・下駄・会津塗物を、石屋多平より伯州境（現・鳥取県境港市）

河西屋源蔵へ運賃請け合いにて届けるため、三月二十一日竹野浜を出帆した。しかし、追い風が無く同日暮れに漸く訓谷村（現・兵庫県城崎郡香住町）に着船した。その後、風具合が悪く変わり、二十四日まで停船し同日出帆、昼ごろに津山（ママ）に着船した。ここで、酒粕二〇〇貫目余一一俵にして買い積み、朔日に出船した。ところが、途中より西風に変わり、竹野浜に戻り干鰯七五俵を買い積み、四月四日に東風になったので出帆した。その後、風も思うように吹かず、のらりくらりとして、五日にやっと因州岩井郡網代浦（あじろ）（現・鳥取県岩美郡岩美町）に着いた。ここで風待ちをしているうち、風波が次第に強くなり、市松を元船に残し、多三郎・豊蔵は綱を打ち直すために、艀で漕ぎだした。その時、高波が襲い同国須井村（ママ）小兵衛船に乗り移った。市松も危険になり、同船に泳ぎ着いた。地元では、いろいろ救助の手を差し伸べてくれたが、天災のため人力におよび難く、小兵衛船は浜辺へ打ち上げ、多三郎船も磯辺に寄せ破船してしまった。

ここの記事で注目されるのは、風待ちが非常に目立つことである。これは、あとの記事にも多く出るが、当時の廻船がいかに風任せの航行であったかが知られ、風が無い場合は、十日でも一カ月間でも風が吹くまで待ったものである。

さて、このような状況を村役人より役所へ直ちに届けられ、早速役人が出張して取り調べた。夜は高張提灯を出し、流失した積み荷などの寄り物の届け出や、いろいろ親切に気配りをしてくれた。そして、流れ寄った積み荷・船体・船道具を残らず取り寄せ、海底に沈んだものまで乗組員に心当たりを尋ねたが、彼らはもう心残りは無いから見切りをつけてくれるよう願書を出した。

そして役人に、国元を出帆して当地で破船するまでの始末を尋ねられ、「船往来」「宗門改」「年齢」などを

聞かれた。しかし、「船往来」は破船の時流失してしまったが、「寺手形」は所持していたので、宗旨は「真言宗で檀那寺は龍海寺、年齢は多三郎が四十九歳、豊蔵十四歳、市松十二歳」と答えた。

なお破船の時は、当村民や近村の者が「不法」「不人情」におよんだということは見聞せず、万時親切に世話をしてくれ、すこしの不満も無い。取り集めてくれた船具など競売に掛け、終了した上は帰国を許可してくれるよう願い出たところ、周辺の村々へ触れを出し入札となった。その内訳は、合計五三八貫八一三文で、八貫四五〇文は沈み物一〇分の一、二二貫七一五文は浮き物二〇分の一とし、計三一貫一六五文を当地網代浦へ、拾得物の報酬として渡された。差し引き、五〇七貫六四八文が船頭多三郎らに戻った。前掲(1)の加賀国安宅町浦で難船した藤右衛門船では、拾得物報酬を辞退したが、ここでは定法に則って、沈み荷物一〇分の一、浮き荷物二〇分の一の報酬が与えられた。

なお、こうした『口上之覚』に記された破船の顚末と、入札の品名と代金を記した網代浦の村役人の『浦手形之事』[10]が渡された。これには、中庄屋・大庄屋の奥書と、因幡中将の役人の奥書がある。

(B) 他国廻船

(1)『乍レ恐奉二願上一口上書之覚』[11]によると、越前国安嶋浦（現・福井県坂井郡三国町）吉右衛門船（沖船頭長右衛門、水主権次郎ら八人乗、便船人二人、合計一〇人）が、長州から塩を買い積み、文政九年（一八二六）十月三日伯州境（現・鳥取県境港市）を出帆した。しかし、五日夕方ごろより風が強くなり、柴山湊（現・兵庫県城崎郡香住町）へ入津する予定であったが、一向に風が治まらず、やむなく津居山湊（現・兵庫県豊岡市）へ入港することにした。ところが、冬入りであるのか、風の方がなお続き、竹野浜の賀嶋山という山より

半里の沖で、風はいよいよ増し高波となり、当浦灘へ流れ寄り磯の岩瀬に打ち寄せ破船となった。乗組員は、弁天山という所へ這い上がり、大声で呼んだら村人が聞きつけ、早速村役人・村人が大勢集まり救助された。そして、食事や着物などが運ばれ、いろいろ世話をしてくれた。また、流れ寄った船具なども引き上げられて、翌日には柴山番所・船役に村方より届けがいき、役人が早速出張してきた。積み荷の塩は、難船の時残らず沈んでしまったが、我々は当竹野浦に対してはすこしの言い分もなく、早く国元へ帰国できるようにしていただきたい。

以上のような内容の「口上書」を、沖船頭長右衛門と宿の八郎右衛門から竹野の村役人に出している。これに対して、竹野の村役人や船役、沖浦村・上計村・浦上村の各庄屋が、柴山番所へ浦状を下付してくれることを願っている。その『浦状』[12]は、

覚

船頭長右衛門口上書之通、十月五日夜之大風ニ竹野村浜崎之瀬ニテ致二破船一候趣、竹野村ゟ相達候ニ付、早速罷越村役人共立会遂二吟味一候処、前書之通相違無レ之候浦状、依而如レ件。

但州丹生柴山番所　　仙石道之助内

太矢什蔵

戌十月十一日

三国湊

浅田二左衛門殿
新保浦
道実彦六殿

となっている。

なお、流れ寄った船具などを競売し、合計三貫一四四匁一分九厘となった。この内、浮き荷物報酬二〇分の一として八三匁九分一厘、沈み荷物報酬一〇分の一として一四六匁五分六厘、計二三〇匁四分七厘が村方へ支払われ、計算が合わないが、残り二貫七一九匁七分二厘を船頭に渡された。またここの事例で、便船人（便乗人）として長松・要四郎の二人が乗っているが、便乗がわりあい自由に行なわれていたことがわかり、当時の人々の移動（交通）の一つとして注目すべきであろう。

いっぽう、打碇二挺・苧綱四房を船頭が競売で買い戻したが、他の船道具とともに残して帰郷することになった。そこで、宿の八郎右衛門宅に預け、来春の便船が来たら、運賃を定め三国（現・福井県坂井郡三国町）の紙屋吉郎右衛門方まで届けるという、『覚』『船中預り物之覚』[13]の史料も残されている。

(2)ここに、『差上申浦証文之事』（嘉永三年（一八五〇）五月十八日、当御代官所、但馬国美含郡田久日村、百姓代勘九郎・年寄仁右衛門・庄屋次郎三郎出、増田作右衛門様御手代宛）[14]という浦手形がある。それによると、大坂柳屋利三郎所有の大型廻船（沖船頭栄蔵、水主・炊ら一六人乗組員、二七反積〈一五〇〇～一八〇〇石〉）が、出羽国の年貢米を積み受けることになった（廻船御用達）。そこで、嘉永三年正月二十四日手続きを終えた空船を、出羽国酒田湊（現・山形県酒田市）に向かって出帆する予定であった。しかし、逆風のために二月三日まで停

船、同四日に天候が良く出帆のつもりであったが、病人が出て同十日まで停船した。十一日に出帆しようとしたが、西大風につき停船し、十二日には天候が良く出帆の段取りをしたが、再び水主仁平が病気になった。そこで、代わりの者を探したが差し当たってみつからず、出帆も遅れていることでもあり、船主の柳屋利三郎が水主の代わりに乗り出帆した。利三郎は、元来は船方の手腕ある者で、船中の諸差配もすることになった。二月十八日、西大風につき、摂州兵庫湊（現・兵庫県神戸市兵庫区）へ入津し、二月二十三日まで停船した。二十四日、天候が良く出帆したところ、三月七日北風で長州下ノ関（現・山口県下関市）へ入津、八日まで停船した。九日天候が良く出帆、十五日北風にて雲州加賀浦（現・島根県八束郡島根町）へ入津、十七日まで停船した。そして、十八日天候が良くなり出帆し、漸く三月晦日に羽州酒田湊へ入港した。

四月十三日、空船の御改を受け、十八日に米一一八〇石余（三斗七升入俵、三一九〇俵）を積み、二十日に出帆しようとしたところ、西風高波で五月一日まで停船した。二日天候が回復し出帆という時、乗組員のうち水主平蔵外一人が病気となった。どうも乗船できない様子なので、酒田湊に置き、代わりの水主も差し当たりみつからず、取り敢えず下関まで行って雇い入れることとし、そのまま出帆した。

五月八日逆風となり、佐州小木湊（現・新潟県佐渡郡小木町）へ入津、九日天候が良くなり出帆したところ南風になり、能州猿山沖（現・石川県鳳至郡門前町）の所から風が増し、次第に危険な状況となってきた。乗組員一同、陸地へ漕ぎ寄せるため、船頭の糧米や船中の道具なども海に投げ捨て、大事な書類は船主の利三郎・船頭の栄蔵が持ち、全員髪を切り諸神に祈願し、身命の限り種々の手段を尽くした。しかし、高波や暗くなり方角も不明で類船もみえず、沈没しそうになり、やむなく夜伝馬船に乗り移り、様子をみていたら本船は

たちまち沈没してしまった。

現在は、隠岐と因幡の国境の所かとも思いつつ風に任せ、三、四十里ほども西風に漕ぎ乗っていたところ、五月十三日田久日村（現・兵庫県城崎郡竹野町）字荒磯という所に漂着した。伝馬船は岩石につなぎ、一同村役人へ届けでて、早速大坂の廻船差配人方へ破船の始末を報告するため、水主安兵衛を遣わした。

「勇蔵外二人は、波に押し流され溺死したようである。また、伝馬船は翌朝見てみると、強風波のために、つないであった縄が解け、沖へ流失した模様である。」

以上、破船の様子を報告しているが、この中で驚くことには、

乗組一同申合御米売払破船之姿ニ罷成候儀ニ者無レ之哉、勇蔵外弐人者右売払方同意不レ致候ニ付、乗組一同申合溺死為レ致候義ニ可レ有レ之旨再応仕ニ吟味一御座候得共、右体之儀ニ者決テ無レ之、前書申上候通聊無二相違一義、[15]

として、このような犯罪的行為は決して行なっていないとしている。こうしたことが、時々あったのであろう。

『高札之写』（浦高札）[16]にも、「船頭浦之ものと申合、荷物盗ミ取はねたるよし偽申におゐてハ、後日聞といふとも、船頭ハ勿論申合輩悉可レ被レ行二曲事一事」とし、『廻船荷物出売買幷船荷物押領いたし候もの御仕置之事』[17]にも、「打荷或破船と偽、荷物を致二押領一候もの、船頭獄門、上乗同罪、水主入墨之上重敲（たたき）」と、厳罰を以て対処している。特にここの場合は、御用船なので、厳重な取り調べであったことが想像できる。

(3)文政四年（一八二一）九月、竹野村庄屋八郎右衛門から、出石藩の役人岩田源太郎へ宛てた『乍レ恐御内々御届奉二申上一口上覚』[18]によると、文政四年九月十七日、竹野村の牛飼いの子供（孫七郎子息兵蔵、五郎作

子息文蔵）が、牛を賀嶋山下で野飼いしていたところ、沖の方から懸硯（かけすずり）（船簞笥）が寄ってきて、嶋端に打ち上がった。そこで、それを拾い直ちに村役人へ届けた。村の方では、大方先月の八月十五日の大荒れに破船した品物であろうと思い、懸硯を調べてみた。すると、その中にあった「往来手形の写」から加州石川郡粟崎（現・石川県金沢市）の木屋藤右衛門船のものであり、金子五〇両余や、少々の品物も出てきた。しかし、「お金のことであり、人々の欲心も起こりかねないので、村内には知らせず先方の藤右衛門に返却したく、役所の添え書きをいただけるよう、内々にお届けするのでよろしくお含みおき下さい」というものであった。ところが、この内々の申し出に対し、急ぎ沖浦（現・兵庫県城崎郡香住町）番所へ届けるように達しがきた。そこで、いままでの経緯を申し出たところ、番所代の権太夫が、その届け出の遅れに大変立腹しているという。

この遅れについては、『分類出石藩御用部屋日記』[19]に、「文政四年九月二十九日、美含郡竹野村庄屋より、難破船？の漂流物（掛硯）拾得届け」とでてくるので判明する。つまり、十七日に発見しているので、十二日間も経過していることになる。これに関しては、浦上村・上計村・沖浦村の各庄屋の奥書とともに、竹野村の役人が番所に『奉二申上一一札之覚』[20]を提出している中に、次のように申し訳をしている。

庄屋が、役向きで城下へ出張して留守をしていたので、役所の見分を願うことなく勝手に見届けてしまった。「二十三日には、庄屋が帰村したので早速届けなければならなかったが、二十五日の氏神祭礼でそのままとなっていた。こうして、十月の朔日に漸く届ける羽目になったが、この遅れたこと、また見分もなく勝手に開けてしまったことについては大変申し訳けなく、御番所様より御上様表（出石藩役所）へよろしくお取り成し下さい。これからは、どんな小さい寄り物でも早速お届け致しますので、何卒お許しいただきたい。」以上のよう

な内容の詫状であった。

そこで、文政五年（一八二二）正月二十一日、出石藩からの連絡で加賀藩の役人から次のような書簡が出石藩の役所へ届いた。

「去る四年（一八二一）八月十五日、隠岐国の沖合いでこの木屋藤右衛門船が破船し、沖船頭与兵衛所持の懸硯が流失したものである。これがこの懸硯に間違いなく、相談の結果与兵衛の子供の与三郎に村役人が付き添って、受け取りに差し向けるので、よろしく引き渡してくれるように」と。

文政五年二月十三日、懸硯・金子五〇両余と品物を受け取った。そして、木屋藤右衛門の代理善七郎と粟崎村役人善兵衛が、柴山番所太矢什蔵に礼状と今度のこの件に関して、何の異議もないことの口上書を提出している（『乍レ恐口上書之事』[21]）。なお、『覚』[22]によると、五〇両余の拾得に対して、一〇分の一の報酬五両一歩二朱六匁一分が渡されたことがわかる。

この木屋藤右衛門は、河北潟（現・石川県河北郡西南部〈金沢市地域〉）干拓に失敗し、取り潰され獄死した有名な海商銭屋五兵衛以上の勢威をもっていた。つまり、二、三〇余艘の持船を所有する廻船業者で、大聖寺藩から木屋の山中入湯に見舞いの使者がくるほどの有力豪商であった。

ちなみに、文化十一年（一八一四）六月十六日、同じ藤右衛門の大吉丸（一〇〇〇石積・一三人乗り・米一〇〇〇石を積み受け）が、吉見浦沖（現・山口県下関市）で難船している。[23]

(C) 異郷の地に眠る

このように、海難は積み荷の被害とともに、当然乗組員の生命をも奪うのであった。そしてほとんどが、遺

骸が発見されることなく、海の藻くずと化してしまう。海で働く者として覚悟はしているものの、誠に果なく痛ましい限りである。いっぽう乗組員たちは、海難で死亡するだけではなく、陸の上でもいろいろな災難が待っていた。今日のように、交通・通信・治安・医学などの発達していない当時は、旅に出ることは死を意味し、親族や親しい人たちと水杯をかわし出かけたほどであった。

これから紹介する二つの事例も、北前船で航行中に東北の酒田湊（現・山形県酒田市）で乗組員が発病し、看護の効もなく病死し、異郷の地に葬られたというものである。再び故郷の地を踏むことなく、見知らぬ土地の土となり、これまた悲しい出来事である。以下、その顛末を紹介しよう。

(1)羽州庄内酒田湊の名主長尾椎四郎から、竹野の庄屋伊左衛門に一通の書簡（文政十一年（一八二八）八月二十日付）が届いた。「一筆致二啓上一候、秋冷之節弥御安全被レ成、御勤弥重奉レ存候」[24]の文面から始まる。内容は、竹野の廻船（船頭新右衛門）が七月十六日酒田湊へ入津したが、水主の助七が十九日より傷寒（腸チフス）の症状を訴えた。乗組員や船宿の七右衛門などが相談して、早速医師を頼みいろいろ薬を与えた。しかし、次第に病気は重くなるいっぽうで、さらに別の二人の医師も招き、あらゆる手を尽したが、養生の効もなく八月十五日の夜に病死した。

船宿の七右衛門が届け出て、役人の遺骸の見分が行なわれ、疑わしいところはなく、間違いなく病死であると認められた。そして、遺骸を禅宗持地院（現・酒田市日吉町）境内に土葬としたい旨を、船頭新右衛門が役所に願い出たところ許可された。こうした助七の病死の顛末を、「船頭新右衛門申出候間、如レ此御座候右様御承知可レ被レ下候」[25]と報告を締めくくっている。

(2)いっぽう、年号が不詳であるが、九月十八日付で同じ酒田湊の大庄屋渡辺直右衛門・年寄二木銀郎から、竹野浜役人中へ次のような書簡が届いている。「其御地竹野浜直乗船頭忠右衛門船、先月(八月)十五日国元出帆当湊(酒田湊)江同月廿八日入津」[26]したが、水主の長治郎が病気に罹った。そこで、船場町の小宿太郎右衛門宅に置き、大宿七左衛門や長次郎などと相談の上、意仙という医師を頼み投薬して、水主の清太郎や大宿・小宿の者も厚く看病し、次第に快方に向かった。こうして、一時は全快かと思われたが、しかし次第に重くなり、別の医師桜井道秀も頼み、いろいろ療養を行なったが、その効(かい)もなく九月八日夜明けに病死した。

早速、大宿の七左衛門から役人へ報告し、遺骸の見分となった。大宿・小宿はもちろん、船頭・水主などが調べられたが、疑わしい点はなく、間違いなく病死と確認された。遺骸の処置の願いも聞き入れられ、当地の浄土宗浄徳寺（現・酒田市中央東町）境内に土葬にされた。

以上の始末を、船頭忠右衛門・大宿七左衛門の願いにより、国元竹野浜へ証拠として文書を差し出し、「右之趣御承知可レ被レ下候、船頭忠右衛門并水主之ものとも其御地ェ致二着船一候ハヽ、同人共(より)も御聞取可レ被レ下候」[27]と手紙を結んでいる。

この事例の年代が不詳であるが、前掲(1)の事例にでてきた桜井道秀という医師が、ここにも載っているので、ほぼ近い年代の出来事であることが推察される。

この二人が土葬にされた寺院は、今でも現存するので、いろいろ御住職にお尋ねしてみたが、過去帳や墓石など全く不明であるとのことである。なお、住職の話によると、こうした乗組員たちが酒田湊で死去し、この土地の寺院に葬られたという事例は数多くあり、今日まで語り伝えられているという。[28]『浜坂町史』[29]にも、

文政三年（一八二〇）四月八日、伯州橋津（現・鳥取県東伯郡羽合町）直乗船頭孫七船の徳四郎が、難船を避ける作業中大怪我をし、治療の効もなく死亡した。結局、国元へ帰ることなく、諸寄（現・兵庫県美方郡浜坂町）の竜満寺に土葬にされたことが報告されている。

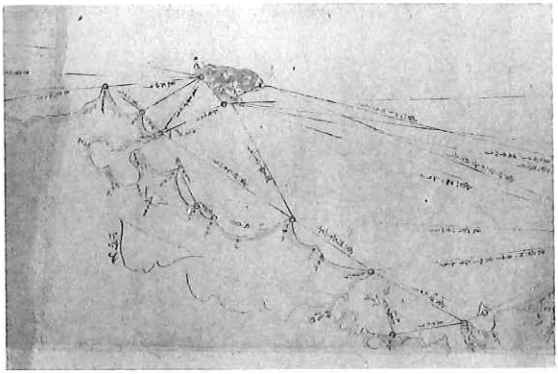
四、海難の周辺

序でもふれたように、北前船の海難は尊い人命を奪うことはもちろん、船体や積み荷を海底深く沈め、その経済的損失も莫大なものであった。小船主などは、たちまち没落してしまうのである。『乍レ恐書付ヲ以奉二願上一口上覚』（嘉永五年（一八五二）六月、浦上村七右衛門、百姓代惣右衛門）[30]にも、

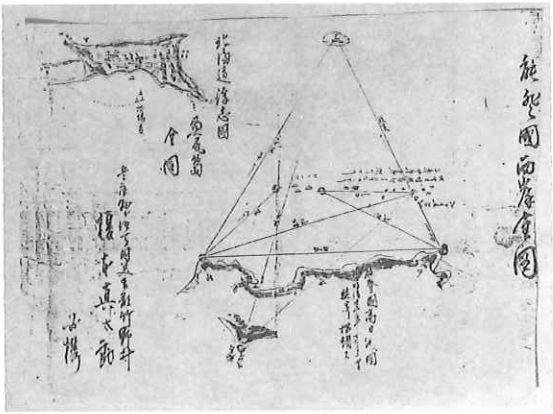
去ル天保九戌年迄、私シ共渡海船仕来候処、同年五月大荒ニテ丹後国湊村（現・京都府熊野郡久美浜町）沖ニテ難破船いたし、乗組六人之内壹人助命致し残五人水死いたし、私し共身分不相応之銀子損失仕り、無レ拠船主幷親類立会之上決算仕法ニ取掛。

として、諸道具・鰯網を売り払って、莫大な損失に充てている。

越中高岡市戸出町の菊池靖雄家から、北前船の五大船主の一つ加賀国江沼郡塩屋村（現・石川県加賀市塩屋町）の浜中家（分家）へ嫁いだ国香氏（明治三十一年一月生、現住・東京都新宿区西落合）の話によると、当時の当主又吉氏（元治元年（一八六四）八月生）も十代から北前船に乗り、国香氏の夫一治氏（明治二十四年十月生）も福井で石川丸という船を造り、初航海に出たが遭難してしまった。そこで、廻船を断念し北海道の岩内で倉庫を持ち、大坂へ送る海産物商を営んだり、鰊の漁場を岩内・稚内に六カ所、鮭の漁場を一カ所など所有し、家も



写290　北前船海図（竹野・大谷保治蔵）



写291　北前船海図（竹野・榎本三喜男蔵）

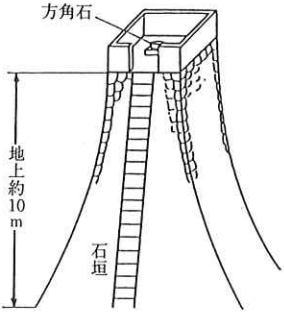
大変栄えたという。

このように、廻船業の船主も近代化の過程において、脱落または他の諸産業へ転業・兼業するなどしていくが、時代的・経済的流れの中で、これらの船主がどのような道を歩んでいったかもおおいに注目しなければならない。

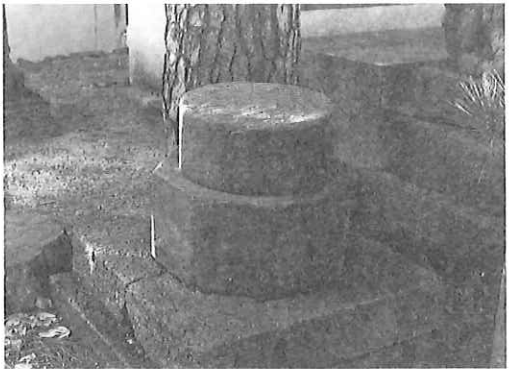
ともあれ、江戸時代の北前船の航行は、実態の中でも出てきたが、風を頼りの航行（追い風帆走）で、風がなくなれば全く航行は不可能で風待ちであった。そして、海岸沿いに陸地の地形（特に山）をみながら航行する「地廻り航法」（地乗り）がおもであった（写290・291）。また、北前船は寄港地で商売をしながら航行する買積船で、速さよりも一度に多くの荷物を積むということになり、海難の一原因ともなった。

鷹野神社（竹野町竹野）境内の北西の隅海に面した所に、地上一〇メートルほどの石垣造りの土壇を築き（図56）、その

図56　竹野港の望台（大浜宮司による）



『船・地図・日和山』（南波松太郎著）より



写292　岡見の方角石（竹野・鷹野神社境内）

上に方角石（これによって、風や雲の方向を見定め、日和を察知した）が置かれていた（写292）。この上に登って、日和（天候）をみるとともに、出船の見送りと入船の望見・連絡をした。また、この望台は入船の目印ともなった。昭和二十三年取り壊したが、方角石は境内に保存されている。台石には、「明治二十九年五月吉日、伯州境港武良（現・鳥取県境港市）宗平、同港山本貞市、当地発起人伊藤三左衛門」[31]の刻字がある。

こうして、長い経験に基づくそれなりの知識・対応は有していたであろうが、近代的天気予報や通信もなかったので、いったん大きい風が吹くとひとたまりもなく海難事件となった。

特に古い船の場合は、その被害をもろに受ける。だいたい、このような船の使用限度は十年ほどであるとされているが、次のような史料を紹介してみよう。『寛文三年大坂町中御仕置御触写』[32]に、

とき船商売之者共古船を買取、其侭船ニテ売買致候ニ付テ、常ニ船を不レ致二所持一者彼船を買取、少々宛繕ひ、

問屋と相談いたし荷物請取、積廻付テ、破船多有レ之由其聞へ有レ之、向後者当座ニ舟をとき、板ニテ売買致へし、若如レ此之船を求置於レ致二商売一者、遂二穿鑿一双方可レ為二同罪一事。

右之条々堅可レ相ヨ守二此旨一もの也、仍テ如レ件。

亥正月十二日（万治二年（一六五九））　　貳人

と、解船（とき）という老朽船を解体する商人を介して、古船をすこし修繕してそのまま使用することがあって、海難の一つの大きな原因となったことがわかる。

五、海難時の対策・祈願と事後処理

(A) 対策・祈願

気象の不安定な日本海側では、前掲のごとく多くの海難が発生した。『旧瀬戸村文書』（兵庫県豊岡市）[33]には、

乍レ恐以二書付一奉二申上一候

北海の儀は秋気相立ち海上風波の難有レ之、冬分には別して渡海難二相成一趣之処、当国船持ども秋に至り何月限りを目当てにいたし、大坂辺へ当国より出帆致候哉之御尋に付、左ニ奉二申上一候。

（中略）

然る処、北海の儀は秋気相立候ては海上不時の強雨・暴風度々有レ之、例年難破船に及候儀に付、運賃銀の儀は二百十日以後は相稼不レ申候えども買積船の儀は廻船は勿論、積請候荷物とも船頭引請罷出候儀ニ付、年柄により海上穏之節はその模様により八月下旬・九月上旬頃までは、荷物積請当国出帆致候廻船も御座

候得共、右は途中に於て海上難二乗廻し一節は、入津之湊に於て廻船荷物とも冬囲い致置、来春尚又乗廻候見込を以て出帆致候儀にて、前出高価の荷物積請け候運賃の儀は難風を恐れ、二百十日以後は荷主ども より他国へ出不レ仕候儀に御座候、右は御尋に付取調候処、相違無二御座一候、以上。

安政三辰年五月

丹後国熊野郡湊宮村
庄屋　与一右衛門
同国竹野郡間人村
庄屋　□　□
但馬国城崎郡瀬戸村
庄屋　甚　兵　衛
同国二方郡浜坂村
庄屋　□　□

鈴木大太郎様
久美浜御役所

と、二百十日など海難の予防対策について述べている。

そこで、海難時にはまず帆を下げ、帆柱を切り倒し碇を降ろす。そして、あらゆる綱を垂らし、船足を重くし船が流されるのを防ぐようにする。また、刎荷（はねに）（荷打）といって、船の安定を保つため、積み荷が捨てられ

写293　五社大明神（北前船の航海安全守護神・賀嶋山）

た。これもまず、乗組員の私物・船道具・糧米、そして最後のやむをえない処置として、もっとも大切な御城米の順で刎荷された。あとで、城米を最初に刎荷したことが発覚したら、厳罰に処せられた。

このように、あらゆる手段を尽して、あとは神仏に祈願するしかなくなった時、前掲のように乗組員は髷を切って、船内の神棚・仏壇に供え、無事にこの危機から逃れられるよう祈ったのである。[34] 多くの船人・漁民に信仰されているのは、船玉神を初めとして、住吉神・厳島神・三島神、そして特に金毘羅神は篤く敬われていた（写293）。

また、海難時に最後の処置に迷った場合、御神籤でお伺いを奉り、そのお告げによっていろいろ行動（進路・刎荷・帆柱の切り捨てなどの可否）を決断している。[35]

地域は異なるが、文久元年（一八六一）三月の紀州新宮鵜殿浦（現・和歌山県新宮市新宮）廻船難破の『浦証文』[36]に、

因テ諸神仏ェ祈願仕、御鬮ヲ立候処、船足軽メ候様御座候ニ付、無レ拠御大切之御荷物同夜五ツ時頃ゟ四ツ半時頃迄ニ刎捨凌居候内、少々風波相和ラギ候ニ付、

と、御神籤を立てたところ、「船足軽メ候様」とでたので、刎荷したとしている。また、伊根町（現・京都府与謝郡伊根町）の安永三年（一七七四）五月の越前国御城米難船では、伊勢大神宮に祈願して「籤取」をした

ところ、帆柱を切り捨てよとの占いによって、帆柱を切り捨てている。[37]

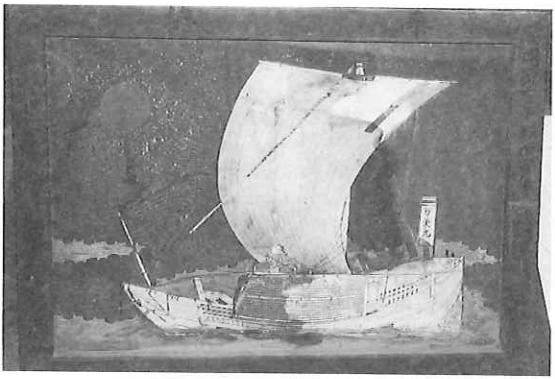
さて髷は、もし無事に帰ることができたら、後述の船絵馬同様髷を絵馬に仕立て、縁故の寺社にお礼として奉納したものである。髷の絵馬は、興長寺熊野堂（竹野町竹野）（金毘羅大権現、写294）に二六点も蔵し、全国でも大変貴重な資料である。

日本海事史学会会長石井謙治氏によると、こうした髷は十八世紀末までは、海の神龍神の怒りを静めるため、海へ髷を投げ入れていたという。このほかに、刀・鏡なども投げ入れていたようで、古代の人身御供の代わりであったのが、十九世紀の初めごろからの金毘羅信仰の隆盛とともに、海に投げるのではなく、船内の神棚・仏壇に供えるというように、意識の変化が始まったことを紹介している。[38]

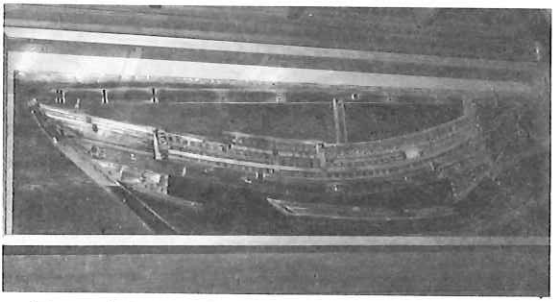
なお、竹野町には、こうした乗組員たちが奉納した船絵馬が多く残されている。興長寺熊野堂（金毘羅大権現）に四八点（船絵馬四七点・船板絵馬一点）、鷹野神社に三点（船絵馬一点〈写295〉・船板絵馬二点〈写296〉）で、いずれも町の重要民俗資料に指定されている（口絵写真参照）。

これらは、彼らが出発前に航海の安全を祈願したり、航海を無事に終え帰港した時、感謝の証として奉納したものである。また、鷹野神社の境内には船霊神社（写297）があり、時々乗組員が髪の毛を白紙に包み、水引を掛けて奉納もしたという。[39] このようにして、海の男の祈りと願いが込められ、庶民信仰の一端がうかがわれる。

写294　興長寺熊野堂（金毘羅大権現・竹野・興長寺境内）



写295　船絵馬（万栄丸「米屋惣太郎奉納・明治７年11月吉祥日」竹野・鷹野神社蔵）



写296　船板絵馬（「船清奉納・安政元年卯８月吉日」竹野・鷹野神社蔵）

写297　船霊神社（竹野・鷹野神社境内）

(B)　事後処理

船が難船・破船した場合、『高札之写』（浦高札）[40]にも、「公儀之船者不レ及レ申、諸廻船共ニ、遭難風時ハ助船を出し、舟破損せさる様ニ成ほと可レ入レ精事」とあるように、近くの船はもちろん、浜から助船（たすけぶね）を出して救助しなければならなかった。そして、救助した浦の役人は、残った積み荷などの保全をはかり、助けた船頭や水主に、本当に海難に遭ったのか、あるいは海難と称して積み荷を横領したのではないかを確認しなければ

ならない。

こうして、その海難の事情を詳細に文書にして提出させ、厳重に取り調べ、その結果を所管の役人へ報告する。また、所管の役人が直接出張して、難船・乗組員・積み荷などを見分する場合も多かった。文化十一年（一八一四）九月の『願上書控』[41]に、

奉二差上一御宿証文之事

青木　与惣様
水原九郎兵衛様　御上下八人

右ハ、浦手御見分ニ御出郷之節、九月二日昼ゟ三日朝迄、御泊り御宿被　二仰付一候得共、兼テ被レ為二仰付一候通り、一汁一菜御酒一切出し不レ申候、為二後日一之御宿証文仍テ、如レ件。

文化十一年戌九月　　美含郡竹野村
　　庄屋　八郎右衛門

田糸浦右衛門殿

と、浦手形見分の役人が出張している。また、天保三年（一八三二）六月十二日付『御公用日記』[42]にも、「久美浜代官所手代中川正作様、難船御改御用に付諸寄村へ御出立、昼時御通に付当村より人足差出し坊岡村にて継申候」とし、十七日昼時の帰途には、細田家へ弁当に立ち寄ったので、お茶と吸い物を出した。夕方には、久美浜に到着する予定であるとしている。

このように、浦役人が乗組員たちの書いた通り、あるいは言い分の通りであることを記載署名し、所管役所

の奥書を認(したた)め、生き残りの乗組員に渡される。この証明書を『浦証文』または『浦手形』といい、彼らはこれを国元の船主に提出して、身の明かしを立てたのである。竹野浜近辺では、丹生柴山（現・兵庫県城崎郡香住町）に諸国廻船の船番所があり、いろいろ廻船に関して管理をしていた。

六、結

以上、病没をも含め海難の事例と実態・その周辺、そして対策・祈願と事後処理を簡単にみてきた。もちろん、竹野浜の海難がこれだけであったわけではなく、もっと多く存在したであろう。しかし、史料不足でどれだけの海難があって、どれほどの人々が亡くなったのか、詳細な数字を摑むことは不可能であるが、寺院の過去帳など調べると、あるていどの数は摑めるであろう。

ともあれ、海難はやはり多かったのであり、特に但馬海岸の小・中型ていどの廻船では、その影響は他に比べ大きかったであろう。つまり、耕地面積に恵まれない但馬海岸の人々にとっては、こうして稼ぐよりほかになかったのである。

このように、北前船は生産・流通の発達を促し、地方経済に大きな貢献をし、一つの日本海文化圏を築きあげた。いやそれ以上に、こうした危険を恐れず未知の荒波の中へ積極的に切り進んでいった海の男の精神こそ、目にみえぬ遺産であり誇りである。と同時に、神仏に祈るさまざまな海上信仰を生み出していった切なる願いを思う時、[43]改めて生きることの重みを認識するのである。

注

(1) 安田清著・港公民館・昭和四十年・二六四～二六八頁。
(2) 浜坂町史編集委員会・浜坂町役場・昭和四十二年・四一一～四一三頁。
(3) 寛政十年～天保十二年・轟・細田昌蔵。
(4) 『分類出石藩御用部屋日記』（出石町・昭和五十七年）。
(5) 竹野・興長寺蔵。
(6) 『福田八郎右衛門文書』（文政二年～六年・竹野・福田敏雄蔵）。
(7) 同前。
(8) 前掲注（2）図書。
(9) 竹野・住吉純一蔵。
(10) 同前。
(11) 前掲注（6）史料（文政六年～十二年）。
(12) 同前。
(13) 同前。
(14) 『大坂船難船証文事』（田久日区蔵）。
(15) 同前。
(16) 前掲注（6）史料。
(17) 『徳川禁令考後聚』（第二帙巻之十八・行刑条例）。
(18) 前掲注（6）史料。
(19) 出石町・昭和五十七年。
(20) 前掲注（6）史料。
(21) 同前。
(22) 同前。
(23) 「近世中期における西廻り航路の航海と海難について―響灘海難史料から―」（小林茂筆『続日本海上交通史』柚木

学編・日本水上交通史論集・第二巻・文献出版・昭和六十二年）三三〇頁。
(24) 前掲注（11）史料。
(25) 同前。
(26) 『福田八郎左衛門文書』（大阪府枚方市・福田安弘蔵）。
(27) 同前。
(28) 「北前船乗組員の墓と船形観音」（『酒田市史』改訂版・上巻・酒田市史編纂委員会・酒田市・昭和六十二年）五二二～五二四頁。
(29) 前掲注（2）図書・四三四～四三六頁。
(30) 轟・細田昌蔵。
(31) (イ)「竹野港岡見」（『船・地図・日和山』南波松太郎著・法政大学出版局・昭和五十九年）七三七～七三九頁、(ロ)『竹野郷外史』(一)・竹野郷土研究会・昭和五十三年）一一九～一二〇頁。
(32) 『大阪市史』（第三・複刻版・大阪市役所蔵版・清文堂出版・昭和五十四年）六六頁。
(33) 『港村誌』（前掲注（1）図書）二四二～二四四頁。
(34) 『伊根町誌』（上巻・伊根町誌編纂委員会・伊根町・昭和五十九年）四一二～四一四・四三二頁には、天保三年（一八三二）九月津軽越中守御城米難船で髷を切り、安永三年（一七七四）五月越前国御城米難船では髷を切って海中の龍神に捧げた事例も紹介している。
(35) 「七、難船・漂流時の慣習」「八、おみくじと船乗り信仰」（柚木学筆『絵馬秘史』岩井宏実編・日本放送出版会・昭和五十七年）二四三～二五二頁参照。
(36) 「徳川時代の浦証文について―紀州熊野廻船難破の浦証文を中心として―」（利光三津夫筆『熊野』地方史研究会編・芸林舎・昭和四十九年）三六四～三九五頁。
(37) 前掲注（34）図書・四三二頁。
(38) 『図説和船史話』（図説日本海事史話叢書一・至誠堂・昭和五十八年）三六二～三六五頁。
(39) 『郷研』（九・竹野の語り伝えと竹野浜の文学・第三集・竹野郷土研究会・昭和五十一年）二二頁。
(40) 前掲注（6）史料。

(41) 前掲注（6）史料（文化十一年正月吉日）。
(42) 轟・細田昌蔵。
(43) 海と信仰に関しては別冊『民俗・文化財編』の「漁業」で少しくふれる。また、拙稿(イ)「来訪神と治癒―医師菊池復堂伝説記録より―」（『説話と思想・社会』桜楓社・昭和六十二年）、(ロ)「海と稲荷信仰」（『朱』第三十二号）、(ハ)「海の修験」（『山岳修験』第五号）各参照。

（付記）昭和五十九年以来、毎年開かれている、加賀市教育委員会主催の「全国北前船セミナー」（講演・講義）では、日本海事史学会会長石井謙治、同評議員牧野隆信の両先生に、いろいろ御指導いただいた。記して深謝の意を表します。

（追記）この小論は、別掲近世編第四章「竹野浜と北前船」の姉妹編となるもので、合わせて参照いただければ幸いである。

あとがき

竹野町の町史編纂事業は、昭和五十五年四月一日、当時の賀嶋堅治町長の提案で、教育委員会に町史編纂担当職員一名配置に始まり、同五十六年七月一日付をもって竹野町史編纂委員十名委嘱で本格化しました。

残暑きびしい八月二十八日に第一回編纂委員会が役場の大会議室で開かれ、委員長に故伊藤俊三氏を選出して、いよいよこの大事業に取り掛かりました。初めのうちは、定例の会議、資・史料の収集、議事録の調査などが主な活動内容でありました。

そのうち、当局から合併三十周年記念に何かを発刊してほしい旨の要望があり、委員会で協議の結果「竹野町歴史年表」を刊行することに決め、調査・編集作業を進め、昭和六十年三月三日に発行することができました。

調査が進むにつれて地元の委員だけでは、調査内容の分析に疑義が生じるようになったため、監修者として、豊岡市田結の西光寺住職ならびに高野山大学教授である日野西眞定先生にご無理をお願いいたしました。先生は寺院・大学のお勤めのかたわら、研究図書や養父町史編纂などでご多忙の身でありましたが、こころよく当町の要望を受け入れてくださいました。

さらに、執筆者として監修者のご推薦により、町外の専門の研究者を委員としてお願いして、江戸時代末までを担当していただくことにし、明治維新以降については、郷土の委員が受け持つこととしました。

また、当初全一冊およそ千ページの計画であった町史を、全二巻構成に変更いたしました。

こうして町史編纂のスタッフがそろい、町史の執筆担当の分担、ページの割り付け、目次の検討に入るとともに、町内視察から始まって、町内外での資・史料集め、各地の聴き取り調査を本格的に進めました。

この間、町外在住の委員の方々には大変なご苦労をおかけしました。一つは、距離が遠いこと、もう一つは、勤務の合間に調査のため来町していただくことでありました。それらの困難を乗り越え、まさに献身的なご尽力をいただきました。

これらの経過によって、今回「竹野町史　通史編」の完成を迎えたわけですが、この間多数の方から貴重な資・史料のご提供をいただきまして誠に有難うございます。せっかく資・史料をいただきながら活用せずに終わったものが多々ありますが、ご了解くださいますようお願いいたします。

なお、三椒村役場が昭和十五年一月に全焼したために、資・史料不足が生じ、三椒村関係で焼失時までの記述に不十分な点があるかと思いますが、御了承ください。

さて、編纂委員の任に就いてから足かけ十年、紆余曲折を経ながらも合併記念の佳日に完結にこ

ぎつけたことは実に感無量であります。ただ非常に残念なことは、この道に携わっていただきながら、はからずも不帰の客となられました方々に思いをはせます時、胸痛む気持ちに迫られます。伊藤俊三先生は歴史年表出版後間もなく病没されました。清水弘一先生は本史執筆の最中に急逝されました。亡くなられた方には、史書を手にしていただくこともできませず、編集の苦労を話し合うこともできませんでした。

終わりになりましたが、監修者・専門委員・町史編纂委員・事務局の皆さんに対し、永年の労苦を感謝し、心からお礼を申し上げたいと存じます。

また、すぐれた技術を生かし誠意をつくして印刷製本に当たってくださいました㈱北星社に謝辞を述べまして、あとがきといたします。

平成二年三月

竹野町史編纂委員会委員長　山本祐雄

【竹野町史編纂の企画から発行までの主な経過】

昭和五十五・四・一	竹野町史編纂事務室を設置し、職員一名を委嘱
昭和五十六・七・一	竹野町史編纂委員会設置要項を制定し、町史編纂委員十名を委嘱
昭和五十八・八・二十	合併三十周年記念に年表発刊を決定
昭和五十九・四・一	監修者を委嘱し、町史編纂事務室を開設
昭和六十・三・三	竹野町歴史年表を発刊
昭和六十・四・一	専門委員（執筆者）を委嘱し、竹野町史編纂基本計画を策定
昭和六十一・十二・六	竹野町史編纂基本計画を一部改正、二巻構成に決定
昭和六十二・十二・五	竹野町史の目次を決定
昭和六十三・五・七	竹野町史の割り付け、執筆担当者を決定
昭和六十三・十一・十九	竹野町史執筆要領を決定
平成元・三・二十五	竹野町史の仕様体裁・ページ数を決定
平成元・五・二十七	監修者・専門委員・編纂委員の合同会議により竹野町史発刊計画を確認し、印刷業者を決定
平成二・三・三	竹野町史　通史編発刊

【竹野町町史編纂委員会（専門委員・執筆者）名簿及び執筆分担一覧】

氏名	本編付編	時代区分（編）	章・節・項	現（前）職
垣田平治郎	本	自然編	総論・第一章	近畿大学附属豊岡短期大学助教授
高松　龍暉	〃	前史・考古編	総論・第一章～第二章	日本考古学協会会員
根井　浄	〃	古代編	総論・第一章～第四章	神戸常磐短期大学助教授
日野西眞定	〃	中世編	総論・第二章第一節～第三節	高野山大学教授
山陰加春夫	〃	〃	第一章第一節～第三節	高野山大学助教授
菊池　武	〃	近世編	総論・第一章～第五章第三節	砺波市立散村地域研究所研究員
			第五章第五節～第六章	
			第七章第二節(1)・第八章	
豊島　修	〃	〃	第五章第四節	大谷大学助教授
日野西眞定	〃	〃	第七章第一節(1)(2)	
木場　明志	〃	〃	第七章第一節(3)	大谷大学専任講師
根井　浄	〃	〃	第七章第二節(2)	
細田　昌	〃	近・現代編	総論・第一章第一節(1)(2)・第二章第一節・第三章第一節・第四章第一節・第五章第一節	前兵庫県立学校長

日野西眞定	〃	〃	第一章第一節(3)
山本　祐雄	〃	〃	第一章第二節・第二章第三節・第三章第三節・第四章第三節・第五章第三節	元香住町立佐津小学校長
乳原　厚彦	〃	〃	第一章第三節・第二章第四節・第三章第四節・第四章第四節・第五章第四節	養父町立三谷小学校長
山田　寿夫	〃	〃	第一章第四節・第二章第五節・第三章第五節・第五章第二節(7)・第五節	竹野町文化財審議会副委員長
平岡　重徳	〃	〃	第二章第二節・第三章第二節・第四章第二節・第五章第二節	元竹野町文化財審議会委員
西　桂	付論文		細田邸庭園・飛蛟泉庭園
菊池　武	付	〃	北前船海難の一研究

【竹野町町史編纂委員会委員名簿】

現在の委員

委員長　山本　祐雄
副委員長　細田　昌
委員　乳原　厚彦　大野　貞紀　落合　良照　木瀬　質
　　橋本　一布　平岡　重徳　山田　寿夫

今までの委員

故伊藤　俊三（前委員長）　故三輪　暉彦　井垣　克巳　垣田平治郎　故清水　弘一

【専門委員名簿】

監修者・委員　日野西眞定　高野山大学教授
専門委員　大森　恵子　明徳商業高等学校教諭
専門委員　菊池　武　砺波市立散村地域研究所研究員
専門委員　木下　浩良　高野山大学図書館司書
専門委員　木場　明志　大谷大学専任講師
専門委員　斎藤寿始子　大谷大学短期大学部教授
専門委員　高松　龍暉　日本考古学協会会員
専門委員　根井　浄　神戸常磐短期大学助教授

専門委員　山陰加春夫　高野山大学助教授
専門委員　山田　知子　大谷大学教授
専門委員　山崎　時叙　日本宗教民俗学研究所研究員

【竹野町町史編纂担当事務局】

現在の担当者

竹野町教育委員会
教育長　井垣克巳（59年～　）
社会教育課長　橋本幹夫（元年～　）
社会教育係長　山崎　守（61年～　）
町史編纂担当　安谷　清（61年～　）

今までの担当者

教育長　小田慶長（　～58年）
教育課長　森脇正美（　～55年）
〃　石田孝一（56年～57年）
〃　永田　保（58年～61年）
社会教育課長　土生田　誠（62年～元年）
社会教育係長　津祢鹿教示（56年～57年）
〃　神田美稲（58年～60年）
町史編纂担当　平岡重徳（55年～60年）
〃　倉橋　孝（59年～61年）
〃　木瀬忠宏（63年～63年）

題字　竹野町長　山本雅康

100 訓練季節・日時数・時刻表……780
101 衆議院議員定員及び有権者数調…784
102 市町村会議員定数及び有権者数調 ‥785
103 議員定数及び有権者数調……785
104 衆議院議員有権者数調……786
105 選挙権の拡大……786
106 町村会議員定数及び有権者数調…786
107 町村会議員定数及び有権者数調…787
108 確定名簿に登録セラレタル有権者数調……787
109 昭和９年室戸台風の耕地被害……797
110 米穀貯蔵倉庫の規模……798
111 昭和５年農家の概況と米、大麦栽培状況……799
112 昭和11年農家戸数と米、大麦の栽培調……800
113 昭和５年養蚕農家調査表（上繭だけ）……804
114 昭和15年養蚕農家調査表（上繭だけ）……804
115 昭和25年村別養蚕調査表……805
116 昭和35年竹野町各地区別ノ養蚕調査表……805
117 昭和45年以降竹野町養蚕調査表…805
118 竹野村木材等の供出割当と実績表 ‥806
119 竹野地域４カ村の木炭生産量……807
120 竹野村の漁船と漁獲高調査表……808
121 竹野村費の公園、海水浴場費支出状況……810
122 但馬丹波小学校教員寄付額調……827
123 教授及訓練時数……832
124 国民学校教科編成……839
125 第１次農地改革前……854
126 第１次農地改革……854
127 農地等買収売渡町村別実績一覧…855
128 旧村からの引継人員と配置状況…860
129 人口・戸数……861
130 救急車発動件数……865
131 火災出動件数……865
132 竹野町麦類作付状況……870
133 竹野町内農家の専業兼業調査表…870
134 竹野町農業用機械所有台数……871
135 竹野町年度別減反面積……872
136 竹野町土地改良事業……874
137 竹野町農協の主な行事……876
138 昭和５年和牛飼育調査表……877
139 昭和35年以降竹野町和牛飼育調査表……877
140 よしづる牛の系譜……878
141 昭和26年のニワトリ飼育状況……879
142 竹野町ニワトリ飼育状況……880
143 竹野町漁業経営体階層別経営体数 ‥883
144 竹野港魚種別漁獲量調査表……884
145 海水浴場等の施設表……888
146 観光客等の宿泊施設表……889
147 観光客入込状況調査表……889
148 簡易水道、特設水道の状況……901
149 ４指令と通達……903
150 定時制在校生徒数内訳……917
151 定時制卒業生徒数……917
152 学校状況……920
153 過疎地の実態……926
154 校区毎の人口動態と減少率……927
155 竹野町立小中学校児童生徒の年度別在籍数……927
156 住民アンケート結果集約……928
157 車両数……935
158 (A)村内廻船海難事例……959
159 (B)他国廻船海難事例……961

48 廃藩置県過程一覧表……535
49 主な神社の変遷表……558
50 竹野村の種痘状況……586
51 明治年間の水害……587
52 明治期の火災……590
53 明治10年気多郡・美含郡(各一部)学区編成一覧表……597
54 中竹野第1校(中竹野小学校)就学・出席率表……602
55 竹野尋常高等小学校授業料(明治27年度)……607
56 江差へ入港の竹野村廻船……611
57 慶応4年(1868)以降浜田市外ノ浦に入港した竹野の船で売買商品のわかるもの……624
58 慶応4年(1868)以降浜田外ノ浦港に入津した竹野の船で売買商品は不明だが入津記録のあるもの……626
59 郵便略年表……637
60 竹野郵便局略史……640
61 森本郵便局略史……640
62 竹野郵便局歴代局長……641
63 森本郵便局歴代局長……641
64 簡易郵便局……641
65 歴代局長……642
66 郵便料金変遷表……642
67 明治3年須野谷村の状況と産物報告……668
68 奥竹野村繭生産量……669
69 奥竹野村和牛飼育状況……671
70 明治19年(1886)竹野地域の漁業概況……674
71 明治19年(1886)竹野地域の漁船…674
72 明治19年(1886)竹野地域漁具保有量調書……675
73 明治19年(1886)漁船の用材と新造費……676
74 補助金を受けた竹野村の新造漁船 ‥680
75 竹野村工業戸数調　工業(石工、大工、木挽、桶工、鍛冶等)……681
76 昭和年代の青井石材生産量……682
77 明治6年鬼神谷村諸職人書上帳…683
78 旧陸軍常備団隊配備表……690
79 明治37年度奥竹野村事務報告兵事之部……692
80 城崎郡伝染病患者発生数調……702
81 大正8年度産米検査成績表……738
82 大正9年調査町村戸数表……738
83 杞柳作付反別及収穫高調……739
84 奥竹野村出稼者調……740
85 竹野町の季節出稼労働者の業種別職業紹介状況……741
86 奥竹野村の養蚕組合に対する補助金支出額……747
87 中竹野村の養蚕組合及び農会への補助金支出額……747
88 奥竹野村養蚕状況……748
89 大正10年春蚕成績……748
90 奥竹野村但馬牛飼育状況……750
91 大正14年但馬牛飼育状況……750
92 大正14年の木炭生産量……753
93 竹野村の動力船……754
94 竹野川流域水害調査表……762
95 大正7年水害による流域別被害…766
96 大正7年水害による無利息国庫資金貸付状況……766
97 北但震災の罹災家屋並びに人口…770
98 大正8年死亡者病類別調査……772
99 明治～昭和初期の経済状況……776

53 竹野海岸国民休暇村全施設配置図……863
54 道路図……935
55 庭園図（近江八景をテーマ）の描かれた家図……944
56 竹野港の望台……977

表

番号　表　ページ
1 竹野町の地目別面積……3
2 竹野川の支流と小支流……5
3 月別日照時間　月別平均気温……11
4 月別平均湿度　月別降水量……11
5 豊岡における積雪量（年）……12
6 豊岡における天気日数（年）……12
7 豊岡における最高気温と最低気温·12
8 植物ごよみ……12
9 動物ごよみ……12
10 但馬の地史……13
11 北但層群層序……16
12 照来層群層序……17
13 但馬旧石器遺跡一覧表……31
14 出持地墳墓群 IA 区土壙墓一覧表‥62
15 阿金谷古墳群一覧表……66
16 竹野町内土器散布地一覧表……78
17『但馬国正税帳』にみえる雑用穎稲使途費目……106
18『但馬国正税帳』にみえる国司巡行使途費目……106
19 行基開創寺院〔但馬地方〕……142
20 行基開創・関係寺院〔兵庫県下〕…142
21 行基建設の宗教・社会施設……144
22『但馬国太田文』にみえる美含郡の所領構成……159
23 室町幕府但馬国守護一覧……164
24「興長寺領年貢進納責任者一覧」（上位者のみ）……172
25 元文4年・延享2年竹野谷家数・人口・寺社数・牛数……222
26 椒四ケ村戸数・人口の変遷……224
27 竹野谷各村々指出帳にみられる『御水帳』所蔵状況……241
28 指出帳からみた各村の牛の頭数…284
29 城崎郡竹野町木地屋一覧……300
30 文化・文政年間の竹野浜所有船数『舟手形之事』……307
31 北前船寺請状発行表……319
32 津居山港竹野村廻船入津状況……323
33 竹野浜村廻船外ノ浦……325
34 竹野谷の史料からみた米価の移り変わり……343
35 竹野谷の山論の発生と原因……351
36 竹野谷の流行病発生状況……363
37 天保8年6月2日竹野谷疫病人・疫病死人……364
38 年中行事関係一覧……369
39 文化5戊辰改『年中行事簿』（年中寺役）神通寺……371
40 天明2年『年中行事』金亀院……373
41 竹野谷の賞賜者……390
42 往来手形からみた旅の内容……400
43 竹野谷を訪れた文人・その他……414
44 荆木結衆寺院一覧表……450
45 『帳簿控』……459
46 竹野谷国別訪村勧進者回数……489
47 竹野谷訪村勧進者の種別……492

294 興長寺熊野堂……981
295 船絵馬……982
296 船板絵馬……982
297 船霊神社……982

図

番号　図　ページ
1 積雪日数……6
2 2月平均最深積雪図……6
3 日本周辺の海流……7
4 竹野町の位置と広さ……9
5 地質構造区分……14
6 竹野町地域の地質……15
7 1万年前の推定海岸線……18
8 ヒトへの道……25
9 旧石器時代のひとびと……26
10 2万年前の大陸と地続きの日本列島……27
11 温泉町の畑ヶ平遺跡出土のナイフ形石器……28
12 海上上山高原出土ナイフ形石器……29
13 椒堂ノ上出土の尖頭器基部……30
14 但馬の旧石器遺跡位置図……31
15 縄文時代海辺のひとびとの生活(小森岡遺跡の想像図)……32
16 但馬の縄文遺跡分布図……33
17 但東町の後天神遺跡出土の爪形文土器……37
18 縁帯文土器拓影……40
19 小森岡出土の石器実測図……43
20 豊岡市の中谷貝塚貝層模式図……46
21 松本の土生谷遺跡出土の縄文土器拓影……48
22 縄文人のくらし……50
23 弥生時代の村の風景……53
24 稲作の伝来……54
25 弥生時代の木製農具……54
26 椒中村出土の壺の模式図……58
27 八鹿町小山石庖丁……58
28 出持地方形台状墓遺構配置図……61
29 出持地方形台状墓出土の壺形土器……63
30 阿金谷古墳群の位置と外形……65
31 阿金谷古墳群出土の土器……66
32 阿金谷の山崎・谷口古墳群……67
33 日高町の楯縫古墳の石室図……70
34 山陰の横穴墓……74
35 阿金谷横穴群出土の遺物実測図……75
36 阿金谷横穴群の配置……75
37 阿金谷横穴群出土の玉類実測図……75
38 竹野町遺跡分布地図……79
39 但馬国分寺発掘調査図……148
40 天保8年天領（久美浜代官）の組分け……235
41 竹野谷、嘉永5年出石領と天領の配置……235
42 慶長9年、須谷領図……237
43 中村道場……461
44 陰陽師分布国……478
45 岡崎校見取図……608
46 日清戦争作戦図……686
47 日露戦争作戦図……691
48 林耕地川替以前の図……731
49 大正7年大水災見取図……763
50 北但地震震央地附近略図……769
51 徐州攻略 武漢攻略 作戦図……812
52 第二次世界大戦日本軍進攻図……813

226 竹野浜海水浴場(大正期)……756
227 大正7年水害……763
228 農園実習……777
229 漁労実習……777
230 出征兵歓送式……811
231 第40連隊の奮戦……814
232 戦死者墓標(宇日)……815
233 戦死者墓標(草飼)……815
234 貯蓄表彰状……817
235 少林寺梵鐘感謝状……818
236 円通寺梵鐘応召式……819
237 第10師団固始城占領……820
238 昭和20年8月13日、須谷に不時着した日本機……822
239 北丹後地震……824
240 室戸台風の被害(轟地区)……825
241 竹野村青年学校沿革誌……830
242 三原青年学校賞詞……831
243 竹野谷青年学校沿革誌……834
244 男子体錬科(剣道)……840
245 竹野国民学校朝礼風景……843
246 疎開児合唱……846
247 婦人会各種記入帳……849
248 新竹野港……866
249 県立中竹野診療所……867
250 奥谷号……878
251 竹野港……885
252 竹野浜防波堤……885
253 竹野浜海洋センターと漁業協同組合……886
254 竹野浜海水浴場……886
255 猿賀嶋公園……887
256 海岸道路から見た賀嶋山……888
257 買出し列車……892
258 伊勢湾台風(轟橋)……894
259 第二室戸台風(羽入橋)……895
260 三八豪雪(竹野駅前)……896
261 ふれあい会館……898
262 町立竹野保育所……899
263 町立森本へき地保育所……899
264 町立竹野児童館……900
265 竹野簡易水道水源地……901
266 ごみ焼却場……901
267 墨ぬり教科書……902
268 初等科教科書……905
269 奥椒中学校第1期卒業生……912
270 発足当時の奥椒中学校……912
271 改築前の中竹野小学校……922
272 改築前の竹野小学校……923
273 改築前の大森小学校……924
274 改築前の森本小学校……924
275 椒小学校……925
276 改築前の三原小学校……925
277 竹野幼稚園第1回修了式……930
278 江野トンネル……936
279 マリンライン……937
280 細田邸と庭門……941
281 庭門と鍵型の中門……945
282 枯滝石組……947
283 細田邸庭園……948
284 飛蛟泉庭園……951
285 出島付近と舟石……954
286 枯山水庭園……955
287 築山上部より俯瞰……956
288 高さを誇る滝石組……957
289 難船救助の礼状……963
290 北前船海図……976
291 北前船海図……976
292 岡見の方角石……977
293 五社大明神……980

161 夜久野茶堂……493
162 念仏札……497
163『遊行上人御通行諸日誌』……510
164『美含郡御領分御巡村御一件帳』…516
165 仙石讃岐守宿札……517
166 瓦版『蒸気船人物退帆図絵』……520
167 官軍からの到来回状……529
168 官軍達書……531
169 地目等級一目瞭然表……538
170 野取図……539
171 戸籍簿……543
172 戸長の領収書……544
173 戸長の領収書……544
174 明治5年の役職名……546
175 副戸長の辞令書……547
176 出石藩の区の構成……548
177 賀嶋山の図・「石碑」とあるところが賀嶋宮跡か……552
178 神通寺建物配置図……554
179 龍海寺建物配置図……555
180 宝暦9年「神社書上帳」……558
181 明治10年「但馬国美含郡神社取調」‥561
182 慶応4年「神社書上帳」……561
183 門谷・稲荷神社脇社、八大荒神厨子裏書……565
184 須野谷・熊野神社、宝暦5年棟札…568
185 坊岡・米持神社、明治5年氏子札…571
186「三宝荒神」の軸……575
187「佐津庄福田郷福田氏系図」……577
188 種痘名簿……585
189 火災給与通知書……590
190 倹約規定……592
191 森本校本校の創立……598
192 小学入門いろは図……600
193 椒小学校（絵）……601
194 学資金徴収記簿・学資切下願日掛附込簿……603
195 学務委員費・枝校雑費取集帳・教員賄米割記帳……603
196 下等小学卒業証書……605
197 二等褒状……605
198『大福帳』……613
199 船模型「天社丸」……615
200 旧船主宅に残る柄鏡と小箱……619
201『買仕切』……619
202『売仕切』……620
203『金額取引帳』……621
204 祈禱札……622
205 現竹野郵便局全景……639
206 美含鉱山跡地……684
207 鉱山使用地の誓約証……685
208 伊藤辨次郎戦闘詳報……687
209 戦地死者記念碑（下塚）……688
210 田村榮蔵従軍記章……689
211 招魂碑（椒）……689
212 伊藤辨次郎の従軍記章と軍隊手帳 ‥694
213 忠魂碑（御又）……695
214 奉天大決戦……695
215 忠魂碑（轟）……696
216 忠魂碑（竹野）……696
217 日本海海戦……698
218 本村出征軍人遺族扶助料株金取集帳……699
219 軍資金承認状……700
220「我古里」の表紙と序文……710
221 林村若連中律憲……717
222 斎藤隆夫の宣言……725
223 斎藤隆夫の漢詩……727
224 大部孫太夫の彰徳碑……733
225 足踏回転脱穀機……738

94 三原木地師の名工、林兵衛作高坏・298
95 竹野谷木地師作の高坏……298
96『高松御所、高氏公木地師江之御免状』……299
97 七ツ玉算盤……301
98 模型千石船……304
99 船名板……306
100『船往来鑑札』……317
101『舟手形』……317
102 船簞笥……319
103『寺請状』……320
104『能登国輪島塗り瓶子』……334
105 柄鏡……338
106 お歯黒道具……339
107『宗門御改帳』……340
108『宗旨送手形之事』……341
109 伊垣大明神……357
110 漢方薬と薬笥……365
111 藤原信房……366
112 御祈禱札……370
113 施餓鬼会……370
114『年中行事』……371
115 大般若宝牘……378
116『年中行事簿』……379
117『山内年中行事』……380
118 涅槃図……381
119 精霊棚……384
120 施餓鬼会……385
121 精霊送り……386
122 三十三ケ所霊場……387
123 下り松荘兵衛碑……396
124 賀嶋崎勘三郎碑……397
125 四国八十八ケ所納経牒……401
126 煙管と煙草入れ……402
127 財布と巾着……402
128 安谷要七が六十六部廻国で使用した鉦鼓と鈴……404
129 坂道造供養塔……406
130 矢立てと印籠……407
131 青谿書院……409
132『池田草庵門人録』……410
133 池田草庵書簡……411
134『寺子教訓書』……412
135 沢庵和尚円通寺零落嘆息の書……415
136 崑山和尚墓碑……416
137 趙陶斎書扁額……417
138 柴野栗山書扁額……418
139『山水奇観』……421
140『手作り百人一首』……422
141 細田敬豊奉納「武者大絵馬」……423
142 細田周岳筆「丸龍」……424
143 御射山翁羅人碑……425
144 歌仙之俳諧……426
145 灌頂記……436
146 継目帳……438
147 上人号を支える文書……442
148 結衆寺法掟記……446
149 龍海寺縁起……448
150 宗門檀那請合掟……451
151 元中村道場主、新免家に伝わる『御文章』……460
152 東中下道場仏間……462
153 東里道場……463
154 旧目坂道場……463
155 宝永5年『許状』……468
156 宝永5年『陰陽師掟書』……469
157 明治2年『王政復古一件』……484
158『熊野山牛玉』……487
159『熊野本宮お札』……487
160『道光寺勧進札』……488

28 鬼神谷窯跡出土の須恵器……76
29 鬼神谷1号窯跡……77
30 但馬の正倉印……92
31 大宝2年筑前国嶋郡川辺里戸籍……97
32 神亀3年山背国愛宕郡出雲郷計帳……98
33『但馬国正税帳』……105
34 平城京跡出土木簡……108
35 平城京跡出土木簡……110
36 平城京跡出土木簡……111
37 平城京跡出土木簡……112
38 天平勝宝2年但馬国司牒……114
39 天平宝字3年越中国礪波郡伊加流伎開田地図……121
40 鋳物師戻峠の大岩……124
41 任国に赴く受領国司……129
42『但馬国太田文』写本……134
43 家原邑知識経……139
44 荆木山観音寺……140
45 賀嶋山龍海寺……141
46『但馬国太田文』……161
47「山名時凞寺領寄進状案」……167
48「山名時凞判物」……170
49「円通寺壁書写」……174
50 青葉城跡……176
51 月庵禅師木像……182
52 寛永14年「寄進状」……189
53 覚増上人木像……196
54 覚増上人位牌……198
55 熊野神社……199
56 宝篋印塔……201
57 法華経の経瓦……203
58 大岡寺跡……208
59 大岡寺本尊薬師如来……210
60 大般若経奥書「第274巻」……213
61 竹野村の地形図……221
62 島津氏伝来の文箱……229
63 領地目録……234
64 旧須谷代官所の門……237
65 検地要具……240
66『但馬国、丹後国、美作国之内郷村高帳』……243
67『定寅歳免相之事』……244
68 庄屋御免状箱……244
69 郷蔵……245
70『申御年貢皆済目録』……247
71 竹野谷通用切手……251
72 大庄屋使用の陣笠……256
73 大庄屋使用の駕籠……256
74 大庄屋細田家……257
75『農業全書』……259
76『占天気』……260
77 竹野谷の庄屋……260
78 廻状……261
79『五人組御改帳』……263
80「但馬竹野浦真図」……277
81 段金山採掘に使用された遺物……279
82 段金山の絵図……279
83 金原鉱山鍛冶屋、大工常右衛門奉納額……280
84 金原鉱山の鉄屑燭台……280
85『御礼一札の事』……285
86 竹野谷宮大工使用の設計図……291
87 木挽鑑札……292
88 大乗寺客殿……293
89 大乗寺客殿棟札……294
90 竹野の大工が忘れたと伝える「のみ」……294
91 大円寺山門……295
92 大円寺山門組み物・彫刻……295
93 隆国寺山門……296

写真・図・表一覧

〈口　絵〉

「諸国名所百景〈但馬 鷹のはま〉」
鬼神谷３号窯遺物出土状況
小森岡出土縄文後期の深鉢
絹本淡彩月庵宗光像
八大荒神（正面・裏面）
模型千石船
難船絵馬
堂ノ上遺跡出土黒曜石
小森岡出土 石鏃
出持地・方形台状墓全景
阿　弥　衣
山名時義木像
山名時熙木像
櫛椒神社
「遊行上人宝物縁起・写」
慶長11年「院号」
鷹野神社
正安３年「郷司某下地」
杲宝僧正木像
明応３年「塩浜寄進状」
垣屋駿河守像
永正７年「目安」
竹野鉱山製錬所
沢庵禅師書・小出家願出

〈見開き〉

但馬国領主別絵図（正徳５年〈1715〉ころ）

写　真

番号　写真　ページ
1 縄文土器の網代底……23
2 但馬出土の尖頭器……30
3 堂ノ上遺跡出土の爪形刺突文土器・34
4 堂ノ上遺跡山形文土器……34
5 堂ノ上遺跡の黒曜石製石鏃……35
6 賀嶋公園遊歩道の波蝕跡……38
7 小森岡遺跡出土の中期の土器……39
8 小森岡出土中津式土器……40
9 小森岡出土福田ＫⅡ式底部……41
10 小森岡出土大型石皿……42
11 松本の小森岡第２地点出土の有茎石鏃（縄文晩期）……47
12 神原出土の石棒……49
13 小森岡遺跡出土の切り目石錘……51
14 小森岡出土の打ち欠き石錘……52
15 養父町のササ遺跡出土弥生式土器・55
16 豊岡市気比の銅鐸……56
17 八鹿町の大山田方形周溝墓……57
18 土生谷遺跡出土磨製石斧刃部……58
19 出持地方形台状墓遠望……60
20 出持地遺跡の方形台状墓全景……61
21 下塚の小山古墳……69
22 草飼の寺谷古墳の巨石……71
23 美方町の水間４号墳の玄室床面……71
24 田久日のヨゴレババ１号墳石室内部……72
25 ヨゴレババ２号墳の墳丘……72
26 宇日の横穴式石室古墳……73
27 南アンジャ古墳出土の瑯……74

歴代議長名簿

（昭和30年より）

代順	氏　　名	在　任　期　間	摘　　要
初代	浜　辺　儀　作	昭30.3.31～昭33.3.28	
2	奥　田　又兵衛	33.3.28～　34.3.20	
3	藤　原　俊　雄	34.3.28～　34.10.15	
4	能　登　五　郎	34.10.15～　36.3.22	
5	垣　田　市　郎	36.3.22～　37.3.23	
6	奥　田　又兵衛	37.3.23～　38.4.30	
7	上　野　政　之	38.5.4～　40.3.15	
8	片　岡　亀　一	40.3.15～　41.3.22	
9	賀　嶋　堅　治	41.3.22～　42.4.29	
10	片　岡　亀　一	42.5.4～　44.5.2	
11	奥　田　又兵衛	44.5.2～　46.4.29	
12	福　田　勇　一	46.5.8～　48.4.27	
13	垣　田　市　郎	48.4.27～　50.4.29	
14	吉　岡　　孝	50.5.8～　52.5.9	
15	木　谷　　薫	52.5.9～　53.3.28	
16	垣　田　市　郎	53.3.28～　54.4.29	
17	井　垣　禎　郎	54.5.10～　54.6.14	
18	福　田　勇　一	54.6.18～　56.5.11	
19	永　田　市　三	56.5.11～　58.4.29	
20	増　田　寛治郎	58.5.9～　60.5.9	
21	永　田　市　三	60.5.9～　61.4.11	
22	黒　田　伊佐雄	61.4.11～　62.4.29	
23	木　瀬　史　司	62.5.8～平元.5.8	
24	吉　岡　　孝	平元.5.8～	

歴代町・村長名簿

新竹野村長・竹野町長名簿　　(昭和30年より)

代順	氏　　名	在　任　期　間	摘　　要
初代	山　本　　匡	昭30.3.21～昭32.3.31	新竹野村
初代	山　本　　匡	32.4.1～ 34.3.20	新竹野町
2	木　下　徳　造	34.3.21～ 38.3.20	
3	木　下　徳　造	38.4.30～ 41.4.29	
4	伊　藤　友四郎	42.4.30～ 46.4.29	
5	伊　藤　友四郎	46.4.30～ 50.4.29	
6	賀　嶋　堅　治	50.4.30～ 54.4.29	
7	賀　嶋　堅　治	54.4.30～ 57.4.29	
8	山　本　雅　康	58.4.30～ 62.4.29	
9	山　本　雅　康	62.4.30～ 現　在	

助役・収入役・教育長名簿

助役

氏　　名	在　任　期　間
坂　本　勘治郎	昭30.4～昭34.3
藤　原　俊　雄	34.10～ 38.7
永　田　市　三	38.9～ 42.9
藤　原　俊　雄	42.10～ 50.4
山　本　雅　康	50.6～ 58.1
與　田　敏　夫	58.7～ 現在

収入役

氏　　名	在　任　期　間
永　田　市　三	昭30.4～昭38.9
宇　野　鉱　一	38.9～ 50.4
片　山　平　嗣	50.6～ 58.5

教育長

氏　　名	在　任　期　間
藤　原　俊　雄	昭30.3～昭30.3
坂　本　勘治郎	30.3～ 32.3
永　田　秀　造	32.4～ 33.12
伊　藤　友四郎	34.1～ 42.1
藤　田　幸　一	42.2～ 42.9
岩　本　幹　衛	42.10～ 50.4
小　田　慶　長	50.5～ 59.3
井　垣　克　巳	59.4～ 現在

歴代町・村長名簿

竹野村長名簿　　(明治22年より)

代順	氏　　名	在　任　期　間	摘　　要
1	織　田　五　平	明22．6．1～明24.11.20	
2	福田八郎左衛門	25．3.19～　29．3.18	
3	福田八郎左衛門	29．3.19～　33．3．7	
4	福田八郎左衛門	33．5．8～　37．5．7	
5	福田八郎左衛門	37．5．8～　41．4.27	
6	福田八郎左衛門	41．4.30～　41．7．5	
7	永　田　萬　造	41．7．6～　45．7．6	
8	増田　久左衛門	大1．8．1～大5．7.31	
9	永　田　萬　造	5．9.16～　9．9．2	
10	小　高　熊　造	9.11.30～　13．3.31	
11	小　高　熊　造	13．6.17～昭3．6.16	
12	小　高　熊　造	昭3．6.17～　7．6.16	
13	小　高　熊　造	7．7.22～　11．7.21	
14	小　高　熊　造	11．7.22～　12．1.14	
15	伊　藤　清治郎	12．4.13～　15．1.14	
16	小　高　熊　造	15.12.27～　16．9.15	
17	山　下　純　三	16.10．6～　20.10.15	
18	木　下　德　造	22．4.15～　26．4．5	
19	木　下　德　造	26．4.22～　30．3．2	
			昭和30年3月3日 合併

歴代町・村長名簿

中竹野村長名簿　　(明治22年より)

代順	氏　　名	在　任　期　間	摘　　要
1	花　垣　総一郎	明22.5.21～明24.3	
2	木　瀬　貞　雄	24.3.6～　28.3	
3	吉　岡　與兵衛	28.3.2～　32.3.5	
4	井　垣　康市郎	32.5.5～　36.5.4	
5	谷垣　傳右衛門	36.5.15～　40.5.14	
6	大　部　孫太夫	40.5.21～　41.4.20	
7	細　田　平四郎	41.5.1～　44.12.30	
8	大　部　孫太夫	45.2.13～大4.3.20	
9	橘　　與兵衛	大4.4.6～　4.8.23	
10	橘　　與兵衛	4.9.29～　8.9.10	
11	橘　　與兵衛	8.9.23～　11.2.20	
12	井　垣　彌兵衛	11.3.22～　14.10.28	
13	木瀬　六郎太夫	14.11.18～昭3.8.6	
14	井津三郎左衛門	昭3.8.19～　7.8.18	
15	井津三郎左衛門	7.8.19～　11.8.18	
16	井津三郎左衛門	11.8.19～　15.1.21	
17	谷垣　傳右衛門	15.1.23～　19.1.22	
18	谷垣　傳右衛門	19.1.26～　21.3.25	
19	井　津　準一郎	21.3.25～　21.10.12	
20	井　垣　石　光	22.4.6～　26.3.17	
21	井　垣　石　光	26.4.23～　30.3.2	
			昭和30年3月3日合併